# 私立養護学校の高等部専攻科における教育課程の特色

## —本科と専攻科との関連を中心に—

渡　部　昭　男*

# A Study on Characteristics of Curricula in Postgraduate Courses of Upper Secondary Departmants of Private Special Schools in Japan

## —in an aspect of relationship between regular course and postgraduate course—

Akio WATANABE *

学校から社会へ，子どもから大人へのトランジション（移行）保障は，中等教育とりわけ後期中等教育の重要な機能の一つである。また，中等教育修了後においても，継続的で持続的なトランジションサービスが整備されるべきである。その際，障害を有する青年の場合には高等部専攻科が継続教育機関として大きな役割を担っている。盲・聾学校においては戦後の早い時期から専攻科教育が行われてきたが，養護学校に関しては私立学校に設置されているのみである。私立養護学校７校（1969年度：いずみ養護学校，75年度：光の村養護学校，81年度：旭出養護学校，85年度：聖坂養護学校，94年度：若葉養護学校，95年度：聖母の家養護学校，96年度：三愛学舎養護学校。旭出養護学校のみ３年制で他は２年制）への専攻科の設置経緯と生涯保障体制の整備の一環としての専攻科の特徴については別稿[1)]で既に明らかにした。ここではさらに，３年制の本科と２～３年制の専攻科との関連（連続性と独自性）に焦点をあてつつ，教育課程の特色について明らかにする。

## Ⅰ，学校法人明和学園・いずみ養護学校（宮城県仙台市）—家庭科中心の教育課程—

### １）教育課程の特色

（１）教育課程の創出期

洋裁専門学校・明和女学院を運営していた学校法人明和学園は，1958（昭和33）年に中学校「特殊学級」を卒業した障害女児の職業補導場として手芸教室・いづみ学園を併設した。これを前身として，1962年には高等部単置のいずみ養護学校を開校し，1969年には全国で初めて養護学校に専攻科を開設した。高等部の学科は本科・専攻科ともに家政科ではなく普通科[2)]であるが，明和女学院

*学校教育講座（障害児教育）　Department of School Education (Special Needs Education)
キーワード：養護学校，高等部専攻科，教育課程，トランジション，職業教育，青年期教育

と深く関わった設立の経緯や対象生徒が女子のみであったことから，「家庭科中心の教育課程」が「脈々と継承されてきた基本路線[3)]」であり，いずみ養護学校の特色である。

いづみ学園においては，明和女学院の一隅にあった貸家を教場にして，女学院長・田山仁子を園長として，当初は手芸（刺繍）・編み物，ミシン，作法などの指導を行った[4)]。教育課程という体系は未だなく，生徒から学びつつの「悪戦苦闘の体当たりの指導」であっという[5)]。

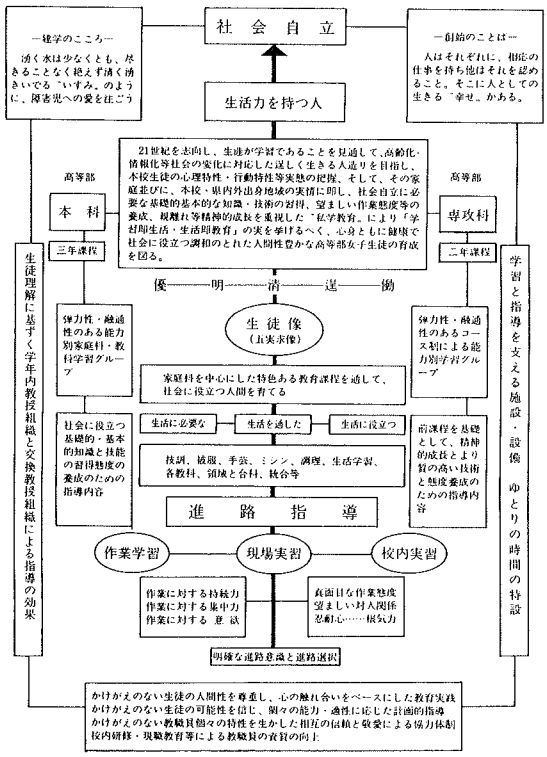
1962年のいずみ養護学校の開校に当たり，認可を得るために一応の教育課程の編成がなされた。そして，「学校形態になって校長先生（引用者注―初代校長・田山彦六）がお決まりになり，先生方が時間割通りに動くようになった[6)]」という。しかし，洋裁専門学校の教育課程や指導法をそのまま用いることは生徒の実態から困難であり，独自のテキストづくりが試みられた。「できるだけ体で教える」「生徒たちには体験する機会を」などの方針の下に，調理，ミシン等の家庭科を中心に国語，数学，体育，音楽，図工，作業学習，学校行事（合宿，修学旅行，遠足，学芸会，クリスマス会等）などが取り組まれた[7)]。ただし，「国語，数学と教科毎の授業は出来ない状態で，調理，ミシン学習の中に国語，数学，社会を組み込んでの授業となったので，生徒も喜んで授業に入り反応をしめすのであった[8)]」というような工夫がなされた。とはいえ，ミシン学習では，生徒自身に「明和のお姉さん達と同じことをやりたいという気持ち」があり，また「技術を持っていれば食べていけるんじゃないか」という教職員の思いから，一つ一つ段階をふむ指導を通して，危険を伴う工業用ミシンなどにも挑戦させていた[9)]。ミシン学習の大きな骨組みとして，具体的には，縫うことの前に形を作る段階を置いて，ものさしの使い方及び型紙づくりを重視した。さらに，ものさしについて目盛りを読むのが難しい場合には身度尺（手の大きさは大体20cmぐらい，5cmは親指の長さとか，自分の体の寸法で測る方法）で教えたり，洋裁学校で教えている割り出し法による型紙づくりが難しい場合には折り紙を使って作らせるなど，「一人一人によくわかるような授業」を工夫したという。なお，寮（寄宿舎）での生活指導や学校と寮とが連携した指導も試行された。

（2）教育課程の改訂期

いずみ養護学校は，開校から12年後の1974（昭和49）年に新校舎が落成し，仙台市内において錦町から安養寺に移転した。その後，1989（平成元）～91年度にかけて，教育課程の全面的見直しをすべく，「一人一人の実態に応じた教育課程の編成はどうあればよいか」を主題とした研究がなされた（89年度：実態調査の方法検討と実施・授業研究を通しての指導計画の検討，90年度：指導計画の作成と授業研究を通しての検証，91年度：指導計画の実践・授業研究を通しての検証と教育課程への反映）。1990年に創立者の田山夫妻が相次いで亡くなった後に第2代理事長をも引き継いだ米森繁（第5代校長，1988年～）は，「間もなく創立30周年になんなんとする本校ですが，県下公立養護学校の高等部設置・高等養護学校の新設・各種学校の諸状況等，本校を取り巻く客観情勢は，開校当初と比較しまさに『隔世の感』ありで，その対応も課題として進めなければなりません。」との認識を示しており，資料Ⅰ―1に示す「社会自立を図る学校教育目標の具現化」の構想に立って「『建学の精神』を現在に生かす事」をめざしたのである[10)]。

その成果の上に，1993年度に大幅な教育課程の改訂が行われた。それまでは，家庭科を被服，手芸，調理・買物学習，家庭管理，技術訓練に細分化して総授業時数33時間中10時間余りを配当していたが，国語・数学・音楽・保健体育などと同様に教科として位置づけていた（資料Ⅰ―2，1984年度の教育課程）。改訂後は，日常生活の指導，生活，作業学習・職業などと同様に「領域・教科を合わせた指導」の中に含め，総合的指導形態として位置づけなおした（資料Ⅰ―3，1997年度の

資料Ⅰ－1　社会自立を図る学校教育目標の具現化
―創始の精神を継承し，障害をもつ女子生徒の健全なる育成―




（出典：いずみ養護学校［1996］『春秋二十有余年』p. 15）

資料Ⅰ－2　1984年度の教育課程

| 一週間の配当時間（本科） | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 科目 | 家庭科（12～13時間） | | | | | 教科（10～14時間） | | | | | | 養・訓 | 道徳 | 特別活動 | 共同作業 |
| | 被服 | 手芸 | 調理 | 管理 | 技術 | 訓練 | 国語 | 数学 | 理科 | 社会 | 音楽 | 図工 | 体育 | | | | | |
| 時間 | 6 | 2 | 2 | 1 | 1～2 | | 4 ～ 6 | | | 2 | 2 | 3～4 | | 1 | 1 | 4 | 3 |

| 一週間の配当時間（専攻科） | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 科目 | 専攻科目 | 国語 | 数学 | 調理 | 保体 | 音楽 | 美術 | 社会道徳 | 共同作業 | 特別活動 |
| 時間 | 17 | 3 | | 1 | 3 | 2 | 1.5 | 2 | 3 | 2 |

（出典：いずみ養護学校［1996］『春秋二十有余年』p. 39）

資料Ⅰ－3　1997年度の教育課程

（本科）

本科は，家庭生活及び社会生活に必要な知識・技能の基本的な内容をとりあげ，家庭科と他教科を関連させ生活に直結する指導内容を設定している。

| 指導形態＼学年 | 領域・教科を合わせた指導 | | | | | | | | | 教科別の指導 | | | | | | | 領域別指導 | | | | 合計週時数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 生活 | | | | 家庭 | | | | | 作業学習 | 国語 | 数学 | 音楽 | | 美術 | 保健体育 | 特別活動 | 道徳 | 養護・訓練 | | |
| | 日常生活の指導 | 掃除 | 農園 | 自然 | 技術科別学習 | 手芸・ミシン | 家庭一般 | 調理 | 調理実習 | | | | 歌唱・器楽 | リズム | | | | | | | |
| 1年 | 6 | 3 | | | 2 | 4 | 1 | 1.5 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1.5 | | 1 | 3 | 3 | — | — | | 33 |
| 2年 | 6 | 2 | | | 2 | 3 | 1 | 1.5 | 2 | 5 | 1 | 1 | 1.5 | | 1 | 3 | 3 | — | — | | 33 |
| 3年 | 6 | 1 | | | 2 | 2 | 1 | 1.5 | 2 | 7 | 1 | 1 | 1.5 | | 1 | 3 | 3 | — | — | | 33 |
| 学習形態 | 学級別 | 学年別 | | | 学年別 | 能力別 | 学級別 | 学年別 | 学級別 | 学年別 | 能力別 | | 学年別 | | 学年別 | 学年別 | 学級・クラブ別単位 | 全教育活動 | | | |

（専攻科）

専攻科は，高等部3年の課程を基盤として，専攻科修了後の自立を目指し，一人ひとりの能力や進路に応じた適性指導を行うため，コース制を導入している。

| 指導形態＼学年 | 領域・教科を合わせた指導 | | | | | | | | | 教科別の指導 | | | | 領域別指導 | | | | 合計週時数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 生活 | | | | 家庭 | | 調理 | | | 職 | 音楽 | | 保健体育 | 特別活動 | 道徳 | 養護・訓練 | | |
| | 日常生活の指導 | 掃除 | 自然 | 課題別学習 | 被服 | 家庭管理 | 調理学習 | 調理実習 | | | 歌唱・器楽 | リズム | | | | | | |
| 1年 | 4 | 4 | | | 3 | 1 | 1.5 | 2 | | 11 | 1.5 | | 2.5 | 2.5 | — | — | | 33 |
| 2年 | 4 | 4 | | | 3 | 1 | 1.5 | 2 | | 11 | 1.5 | | 2.5 | 2.5 | — | — | | 33 |
| 学習形態 | 学年別 | 学年合同 | | 学年別 | 能力別 | 学年別 | 学年別 | | | コース別 | 学年合同 | | 学年別 | 学級・クラブ別単位 | 全教育活動 | | | |

（出典：『平成９年度　いずみ養護学校案内』）

教育課程)。このことにより，家庭科を「単に料理を覚え，刺しゅうやミシンの技術を身につけることにとどまらず，日常生活の指導や作業学習と緊密な連携を図りながら『生活する力』『働く力』をつける，より積極的な人づくりの場[11]」として捉え直すに至っている。

以下に，具体的な指導の変化や工夫を見てみよう。

①手芸・ミシン[12]：以前は生徒の能力も高く，人数も少ない状態で指導可能であったものを，現在は生徒によって「この教材は残す」「これはカットしていく」あるいは，時代にそぐわなくなってきているものを見直して，より実用的なものにしぼっている。

②調理[13]（写真Ⅰ－1）：以前は「本物を味わわせよう」ということで技術的に難しい献立だったが，生徒の経験の差が大きく出てきて難しい献立をこなすのが困難になってきた。そこで，「常に家にある材料で簡単にできるものは，じゃがいもと卵ではないだろうか」ということになり，本科１年生はじゃがいもと卵を中心として繰り返し自分で作れる料理，２年生はカレーライス・魚料理・パン料理・肉料理，３年生は麺料理・ご飯物・テーブルマナーを学習している。その際，あまり経験のない生徒は大テーブルを用いて集団の中で個人指導を行い，身に付いたある程度技術をもう少

写真Ⅰ－1　家庭科・調理の学習

（1997年９月11日の訪問調査の際に筆者撮影）

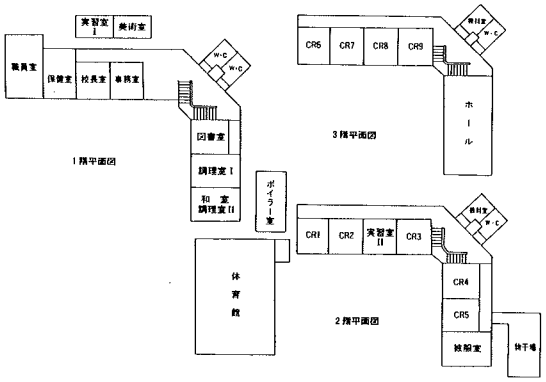
し高める必要のある生徒については家庭用キッチンで指導するというように，個に応じた方法を工夫している。

③生活[14]：「役に立つ学習＝学習即生活」を一番の基本とし，生徒自身が生活の中に生かせるというものを学習の中心としている。生徒の生活一つ一つを取り出して見直し，生徒の能力を高め，身についていないものは身につけていくという指導である。

④音楽[15]：歌唱・器楽・リズムの３領域に分けて取り組んでいる。個人差はあるが，基本的なことも大切にしながら，興味のもてる題材を心がけている。中には，自分からテープを持ってきて「この曲でやってください」という子もおり，積極的に楽しんでやっている。情操面を育てたり，情緒的な安定を図る効果もある。

今日，教育課程の中心となる家庭科は，「依存的な親がかりの生活から脱却し，自分で判断し，自分の意志と責任をもって自立的な生活に移行していく，身辺生活技術や社会生活技術を獲得する最後の機会を『高等部』として捉え，家庭科の学習を通し日常の『衣』『食』『住』にかかわる知識，技能を身につけ，個々人がその持てる力を発揮し，豊かで自立した生活を送るための生活能力と生活習慣を養うことに加え，『働く意欲』『働くための基本的な姿勢や態度』を養い『生活する力』を持つ，逞しい女性を育てるための学習[16]」ととらえられている。

資料Ⅰ－4　校舎配置図（1997年度，いずみ養護学校）




（出典：いずみ養護学校『平成９年度　学校要覧』）

なお，校舎の見取り図（1997年度）は資料Ⅰ－４のようである。

## ２）本科と専攻科との関連

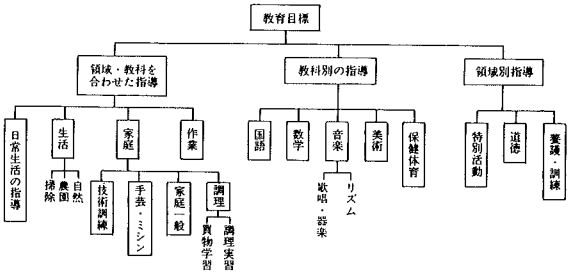
### （１）教育課程の関連

１学年定員は本科24名に対して専攻科は12名であり，専攻科に進学するのは本科生の約半数及び他校からの数名である。学校としては，「３年間一区切りとして『３年卒業の時点で出来るだけ社会に』[16]」という指導を行っているという。

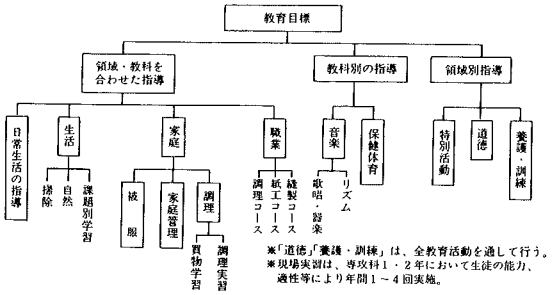
教育課程は，資料Ⅰ－５のように，本科・専攻科ともに領域・教科を合わせた指導，教科別指導，領域別指導の３本柱から構造化されている。領域・教科を合わせた指導としては，日常生活の指導，生活，家庭に加えて，本科では作業学習，専攻科では職業が設定されている。教科別指導においては，本科では国語・数学・音楽・美術・保健体育が，専攻科では音楽・保健体育が取り組まれている。領域別指導においては，本科・専攻科ともに特別活動，道徳，養護・訓練で構成されている。内容的には，本科では，家庭生活及び社会生活に必要な知識・技能の基本的な内容をとりあげ，家庭科と他の教科を関連させて生活に直結する指導内容を設定している。これに対して，専攻科では，本科３年の課程を基盤として，専攻科修了後の家庭生活及び職業生活の自立を目指しており，一人

資料Ⅰ－5　教育課程構造図

(1)　本科




(2)　専攻科

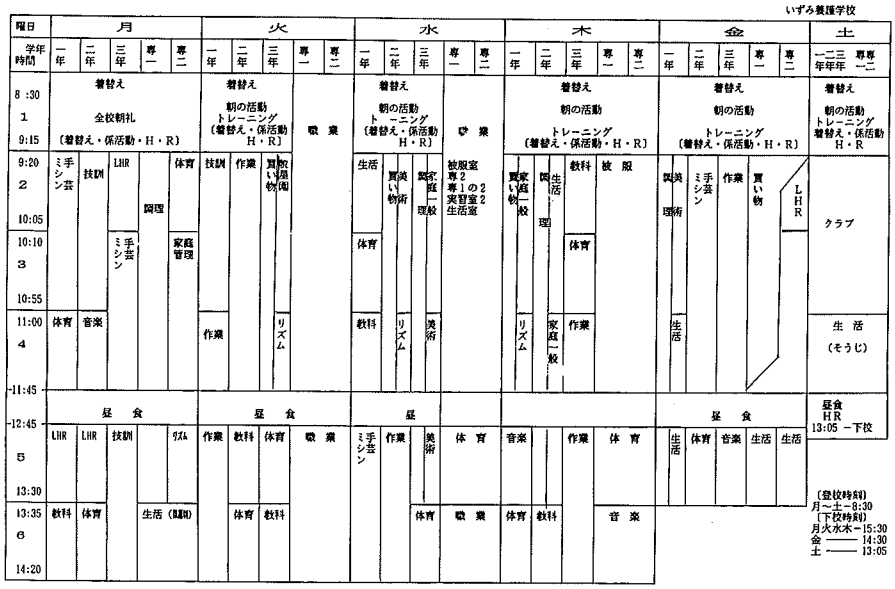



（出典：いずみ養護学校『平成９年度　学校要覧』）

ひとりの能力や進路に応じた適性指導を行うため，コース制の職業が特設されている。また，家庭科の被服及び生活の課題別学習は学年内での能力別・課題別のグループ編成となっている。なお，時間割表（1997年度）は資料Ⅰ―6のようであり，専攻科では職業が2日間（火・水曜日）設定されている。

①職業：専攻科の生徒はいずみ養護学校の本科卒業生と他校からの進学者で構成されているが，障害の状態や学習課題が多様化する傾向にあった。そこで，1989年度より教育課程の見直しが行われ，1990年度から領域・教科を合わせた指導の一環として職業が導入された。1・2年生縦割りの，当初は2コース制であったが，後に縫製・調理・紙工の3コース制となった。コース分けは，「一人一人の適性，将来の進路，課程の意向・事情，本人の希望等を総合し，個々の重点目標を設定した上で担任が決める[17]」ようになっている。ただし，紙工については基本的に専攻科1年生で編成する

資料Ⅰ－6　いずみ養護学校の時間割表（1997年度）



資料Ⅰ－7　進路指導年間計画

いずみ養護学校　進路指導部

| 月 | 進路活動・アフターケア | 学校行事 | 1年 | 2年 | 専攻科1年 | 3年 | 専攻科2年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | ・年間指導計画作成<br>・関係機関への挨拶<br>・実習計画作成と現場実習先選定、実習依頼、 | ・入学式、<br>・始業式<br>・春の遠足<br>・父母総会 | 進路希望調査<br>教育手帳の確認 | | | | |
| 5 | ・お礼状送付、福祉施設、職場訪問、<br>→現場実習生を励ます会 | ・短期休業<br>・運動会 | 進路相談 | | | 進路希望話合い<br>現場実習（試験実施）<br>・企業　・福祉施設<br>励ます会準備 | 励ます会準備 |
| 6 | ・就職対策連絡協議会 | ・夏季合宿<br>・修学旅行 | | 職場見学依頼 | | 校内実習 | |
| 7<br>8 | ・現場実習報告会<br>・同窓会（アフターケア） | ・終業式<br>・夏期休業<br>・始業式 | 職場見学依頼 | 職場見学<br>進路相談 | 進路相談<br>宿泊学習 | 報告会準備<br>進路相談（更生相談所・相談）<br>職業相談 | 報告会準備 |
| 9 | ・アフターケアおよび職場訪問<br>・現場実習生を励ます会<br>・職業相談 | ・四校交歓<br>・専2研修旅行 | 職場見学 | | | 励ます会準備 | 励ます会準備 |
| 10 | ・各施設申込締切り（各福祉事務所） | ・スポーツ大会<br>・学園祭 | | | | 進路希望最終確認<br>求職活動・施設申込<br>現場実習 | |
| 11 | ・進路指導口座<br>・進路指導連絡協議会 | | 交通指導 | | | 宿泊学習 | |
| 12 | ・現場実習報告会 | ・終業式<br>授業参観<br>・冬季休業 | | | | 報告会準備<br>専攻科願書受付開始 | 報告会準備 |
| 1 | ・成人を祝う会 | ・始業式 | 校内実習 | 校内実習 | | | |
| 2 | 22創立記念日 | ・専・本選考日<br>・冬季合宿 | 進路希望調査<br>交通指導 | | | 専科受験<br>テーブルマナー | テーブルマナー |
| 3 | ・進路指導連絡協議会 | ・卒業・修式<br>・修業式 | | 職業評価<br>交通指導 | | 進路決定 | |

（出典：いずみ養護学校『進路指導ハンドブック』p. 5）

ことになっている。これに対して，本科でなされている作業学習は，縦割りの試行を経た後に「生徒一人ひとりの能力や適性をより的確に把握し指導を進めていけるのは学年別指導体制ではないか[18]」という反省がなされ，1994年度からは学年別の学習形態（1年生：紙工芸，2年生：木工，3年生：縫製）となっている。

②進路指導：本科卒業時点での社会参加も視野にいれて，本科生と専攻科生に並行した進路指導がなされている（資料Ⅰ－7，進路指導年間計画）。校内実習は作業学習の発展として1991年度から本科において導入されたものであり，さらに本科3年生と専攻科2年生には現場実習が行われる。校内実習は，専攻科でも試行していたが，1995年度からは上記の職業の充実を図る方向に転換した。なお，就労先としては，家庭科中心の教育課程を反映して，クリーニング・縫製・食品加工業が多いという[19]。

いずみ養護学校では，本科3年・専攻科2年の5年一貫制は採っていない。しかし，本科卒業生の約半数が進学する状況を踏まえて，本科の教育課程を基盤とした専攻科における連続性や積み上げが意識されている。加えて，専攻科の特色として，「『本科とは違うんだ』『専攻科生だよ』という自覚を持たせる」言葉遣いや扱い方，「自信を持たせながら，意欲と自発性」を養うことが重点的に追求されており，職業におけるコース制の導入により「今までいずみの持っていた明るさや優しさとかに加えて逞しさというものが備わってきている」と見られている[20]。しかし，単なる厳しさの押しつけではなく，「厳しさの中に楽しさがなければならない」「豊かな学校生活があった子どもは幸せ」との表現もみられ，「厳しい面を豊かなものに変えていくというのが教師の一つの大事な役目」であるとも考えられている[21]。主体的な学校行事・生徒会・クラブ活動（運動，チアリーダー，歌，合奏，お茶，美術，クッキング，手芸，パズル）等の工夫に加えて，専攻科においては，調理学習に自らの弁当づくりを取り入れたり，寮の敷地内の一戸建て住宅を活用しての自活ホーム実習（専攻科1・2年生で各1回，一人につき一泊二日），専攻科2年生での研修旅行など，自立（自律）した大人への育ちも追求されている。

「自立のためにはどうしたらよいか。豊かな心を持ち，しかも逞しい人間として外に出すためにはどうしたらよいか」という課題を見据えて，「家庭科を中心とした教育課程での人づくり」が目指されているのである[22]。

（2）生徒の育ち

それでは，２年間の専攻科において実際にどのような成長が認められるのであろうか。専攻科卒業生について，性別，主障害，障害程度，卒業後の進路，特記すべき成長などについて専攻科担当教師に記入を依頼する調査（1997年８月実施，以下同様）を行った。

①1995年の専攻科卒業生

1993年３月の本科卒業生30人中，各種学校進学２人，就職６人，職業訓練１人，自営手伝い１人，通所施設２人，入所施設１人，在宅２人であり，専攻科には15人（50％）が進学した。他校から２人の進学者があり，当初は17人であったが，２人が中退した（親の転勤１人，施設への入所１人）。専攻科卒業生15人中，障害が軽度の者は13人，中度の者は２人であり，卒業後の進路は職業訓練校等進学１人，就職５人（内，後に在宅１人），通所施設７人，在宅２人（内，後に通所施設１人）であった。15人の内，専攻科での成長が良好であった者は13人（87％）であり，「働く意欲の向上」「作業能力の向上」「コミュニケーションの向上」「感情的になることが少なくなり落ち着いた言動がとれるようになった」「大人らしい態度と体力の向上」「集中力の向上」等が特記されていた。

②1996年の専攻科卒業生

1994年３月の本科卒業生24人中，就職６人，通所施設３人，入所施設２人であり，専攻科には13人（54％）が進学した。他校から２人の進学者があり，当初は15人であったが，１人が中退した（施設への入所）。専攻科卒業生14人中，障害が軽度の者は４人，中度の者は７人で，中軽度の者が１人，未記入が２人であった。卒業後の進路は就職３人（内，後に家事手伝い１人），通所施設９人，家事手伝い２人（内，１人は医療機関入院の繰り返し）であった。14人の内，専攻科での成長が良好であった者は11人（79％）であり，「働く意欲の向上」「作業能力の向上」「大人らしい態度」「落ち着き」「依頼心が少なくなる」「自信がつく」「精神的なたくましさの向上」「情緒の安定」「集団適応が向上」「問題行動の軽減」「学習参加の向上」「体力の向上」等が特記されていた。

③1997年の専攻科卒業生

1995年３月の本科卒業生23人中，専門学校進学１人，就職３人，入所施設６人，家事手伝い１人であり，専攻科には12人（52％）が進学した。他校から３人の進学者があり，計15人のまま中退者もなく全員が卒業した。専攻科卒業生15人中，障害が軽度の者は５人，中度の者は６人，不明が４人であった。卒業後の進路は就労２人，通所施設９人，家事手伝い３人，在宅１人であった。15人の内，専攻科での成長が良好であった者は７人（47％）であり，「会話面・礼儀の伸び」「働く意志がでる」「持久力の伸び」「自信がつき作業能力が向上」「自己統制力がついてきた」「精神面での伸び」「役割をはたそうとする意識」「体力がつく」「調理での伸び」「気がつく自主的な動き」等が特記されていた。

概ね本科卒業生の半数が専攻科に進学し（中退者は０～２人），引き続き２年間の専攻科課程を修了している。その間，記入者の主観的な判断ではあるが，障害が中度の者や不明の者を含めて約５～９割に良好な成長が認められた。特記事項には諸検査の数値には現れにくい内面的な成長が列挙されていた。

## Ⅱ，学校法人光の村養護学校・土佐自然の家（高知県土佐市）
### —技術教育をめざした教育課程—

### 1）教育課程の特色

（1）教育課程の創出期

光の村養護学校の教育課程は，創立者・西谷英雄の教育観に大きく依拠している。西谷は，1926（大正15）年に高知県に生まれ，海軍省の気象技術者を経て，戦後に小学校教員となった。当初は「つづり方教師」を目指したが，山間の小学校での一人の就学の遅れた児童との出会いから，「良い働きを持ち，良い生活を持つこと自体が，良い文章をつづることなのだ」と「体でつづる生活つづり方」という確信を得て，障害児教育にたずさわるようになった[23]。1951（昭和26）年に高知市立旭小学校の「特殊学級」担任となり，後に当時の高知県には未設置の中学校「特殊学級」の必要を痛感して，1955年に木工機械を備えた「もぐりの中学部」を同小学校内に併設しつつ，小・中・高の一貫した教育保障のために「高知市立養護学校」の設立運動を開始した。1957年には，高知市立城西中学校の「特殊学級」として正式に認可され，旭小学校と城西中学校のほぼ中間に古い建物を改造して「高知市立旭小学校・城西中学校養護分室」として移転した。さらに「城西中学校の補習科という私的な高等部をつくる」ことを思いつき，1959（昭和34）年に紙箱づくりを行う補習科（1961年から財団法人「光の村職業補導所」と改称）を分室に併設して，変則的ながらも「小・中・高一貫教育体制」をスタートさせたのである。それまでの試行を通して「技能や技術教育のもとは生活教育のなかにある[24]」との考えに至り，1)青年期教育の中心を技術教育に置く，2)その前段として生活教育で自立をめざす，3)そのために起居を共にしての24時間教育を行うという方針を持ったのである。

1963年に開設された高知市立養護学校（小・中学部）の教頭に任ぜられながらも，「全寮制で5年制の青年期養護学校を設立すること」を目標としていた西谷は，1966年に退職して「精神薄弱児施設・光の村学園」を開設する[25]。さらに，土佐市に用地を得て，1969年に「学校法人光の村養護学校」（高等部本科3年・別科2年）を開校し，木工場，セメントブロックの実習工場，パンと菓子の実習工場，鉄工場，自動車工場，牧場等を次々と併設した。そして，1975（昭和50）年には別科を廃して2年制の専攻科を開設し，「技術教育を柱とする5年制の青年期学校[26]」を完成させたのである。そして，さらには株式会社や成人施設を開設して「生涯教育体制」を整備する方向へと進んだ。

（2）教育課程の改訂期

しかし，昭和50年代における子どもと子どもを取り巻く状況の変化は「もう技術教育どころではない」と言わしめる程となり，重度化する子どもに早期に対処するために，1983年には中学部を設けて「青年全期に対応する教育体制」（中学部3年：青年期前期，高等部本科3年：青年期中期，専攻科2年：青年期後期の8年制）に改めたのであった。そして，教育課程としては，「体と暮らし方を正常に戻し，依存心を自立心に切り換え，独立をはたす人間に育てる」ために，「体・暮らし・腕・頭と進む教育」，すなわち「まず体—体操学校のように／そして暮らし—生活学校のように／さらに腕—職業学校のように」の3つを徹底した「全人教育」を構想した[27]。

## 資料II－1　1997年度の教育課程

1) 暮らしの質を変える「生活指導」

子供の心身のおかしさは、そのほとんどが過保護によって作られたもので、いわば栄養過剰による根腐病的現象である。だから学校を、まず子供たちが助け合って自立する生活共同体にして「依存する根っこ」を「自立する根っこ」に育てなおす。光の村養護学校が全寮制であるのはそのためである。土を作り、作物を育てる篤農家のように、丹念に育てなおせば、子供たちは必ず自立の方向へと歩む。すべての教育はここから始まる。

2) 体の質を変える「体育」

身長、体重という形態面の発達は標準並みでも、胸囲となると標準以下の者が多い。（脂肪を差し引いた数値）。肺活量も標準値にとどく者が少なく、心肺機能の発達の遅れが目立っている。これは過保護のため幼い時から力いっぱい息をはずませて活動することが少なく、何事もあなた任せの依存生活が作った体質である。だから持久力は極めて弱く、少しの負荷でバテる者が多い。その上に柔軟性が低い。表面的には柔らかそうに見えても、関節という関節は全部びついたように固いから動きは鈍くて不器用である。瞬発力も低く、跳躍力などはほとんど育っていない者が多い。だから感覚機能も、神経回路も十分に育っていない。この鈍重で不器用でひ弱な依存体質を、機敏で器用でたくましい自立体質に作り変えて、自活する人間を育てる。

3) 手の質を変える「作業教育」

子供たちに手は何に使うかと聞くと、「もらう、食べる、遊ぶ」と答える。依存生活は消費するだけであるから強さも器用さも育てない。この子供たちの手は発達が大きく遅れている。

知的障害児は、労働によって強く、賢く、豊かな人間に仕上がる。枯れ枝のような手を、たくましく器用な手に変える訓練を徹底し、仕事に習熟し上達することで、大脳を活性化し、表情を引き締め、考えて働く人間に育てる。

4) ことばの質を変える「教科教育」

「暮らしと体と手の質」が変わり、消費するだけの人間から力強く生産する人間に変われば当然子供は全人的に賢く生まれ変わる。植物も根の働きが活発であれば、葉の同化作用も活発で良い花を咲かせるように、人間も全身で活発に活動すれば頭の働きも活発になる。この３領域が確かに訓練されると、読む学習も、書く学習も、話す学習も、計算する学習も向上し、言語の構造が変わる。つまり、依存する言語構造から自立する言語構造へと転換するのである。

5) 総括

暮らしや仕事の正しい仕方は、一つの理屈の上に成り立っているので、良い暮らし方を身につけ、良い仕事に習熟し、上達するほどに理屈は自然にわかるようになる。

光の村養護学校は、このように教科教育も段階を追って徹底的な指導をする。この４本の柱の教育によって、高度な技術教育も不可能ではなくなる。

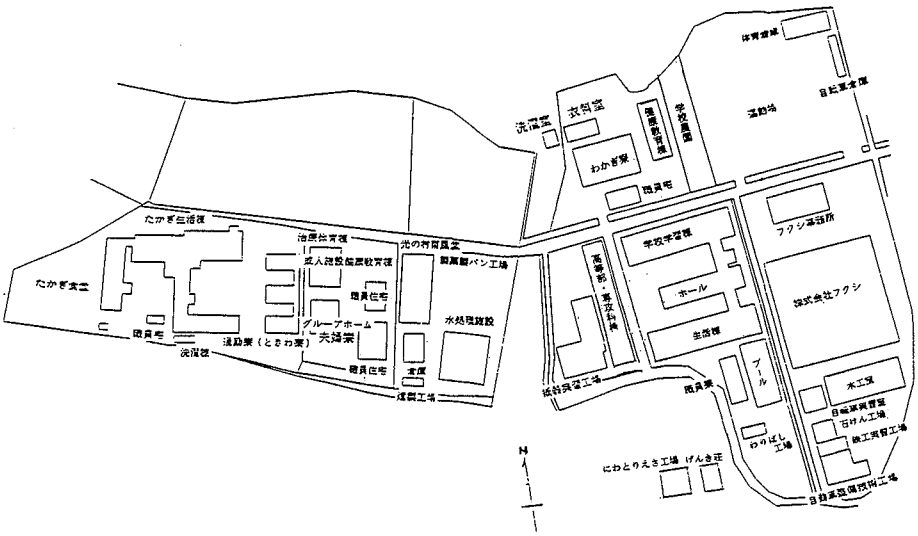
（出典：光の村養護学校土佐自然学園『平成９年度　学校要覧』pp. 3-4）

## 資料II－2　時間割表（1997年度・高等部）

| 期 | 月 | | 火 | 水 | 木 | 金 | | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 紙器実習 | 製パン実習 | 農耕または単元 | 紙器実習 | 農耕または単元 | 紙器実習 | 製パン実習 | 木工 |
| 2 | | | | 製パン実習 | | | | |
| 3 | | | 教科 | | 教科 | | | |
| 4 | 紙器実習 | 製パン実習 | 洗たく | 洗たく | 洗たく | 紙器実習 | 製パン実習 | 大掃除 |
| 5 | | | 体育 | 体育 | 体育 | | | 体育 |
| 6 | | | 音楽 | 入浴生活 | 太鼓 | | | 太鼓 |
| 7 | 掃除 | マラソン | 掃除 | 掃除 | 掃除 | 掃除 | マラソン | 入浴生活 |
| | 縄とび | | 縄とび・剣道 | 自習 | 縄とび・剣道 | 縄とび | | |
| 8 | 入浴生活 | | 入浴生活 | | 入浴生活 | 入浴生活 | | 洗たく |
| 9 | 洗たく | | | | | 洗たく | | |

（1997年９月12日の訪問調査の際の教室掲示物から）

## 資料II－3　土佐光の村・全体図




（出典：光の村養護学校土佐自然学園『平成９年度　学校要覧』p. 12）

今日では，資料Ⅱ―１に示すように，「暮らしの質を変える『生活指導』」「体の質を変える『体育』」「手の質を変える『作業教育』」「ことばの質を変える『教科教育』」の４本柱の上に，「全人教育の中核」としての技術教育を位置づける教育課程の構造となっている。高等部の時間割表を例示すると資料Ⅱ―２のように４本柱が組み込まれている。

なお，土佐自然学園を含む土佐光の村の全体図は資料Ⅱ―３のようであり，生活学舎・体育学舎・労働学舎が一体的に整備・配置されている。さらに，海・山・川など「自然と子どもが混然一体となって交わるなかで，活力をとり戻し，青年らしい生活を回復する教育の場所」としての自然学舎を加えて，「４つの学舎」が設定されている[28]。例えば，中学部３年生では土佐湾一周卒業旅行，高等部３年生では宮古島トライアスロン（水泳１～３km・自転車155km・マラソン42.195km）などへの挑戦がなされている。

## ２）本科と専攻科との関連

### （１）教育課程の関連

教育課程は，高等部の本科と専攻科とで区分して示されてはいない。しかし，主要年間行事予定（資料Ⅱ―４）を見ると，現場実習（写真Ⅱ―１）が高等部本科３年生では５・11・12月に，専攻科では５～７月及び10～12月に設定されており，高等部本科３年生を過渡期として，専攻科では「技術教育コース」（資料Ⅱ―５）に移行するものと推察される。専攻科では「仕事のプロ」の養成が目指されている。

資料Ⅱ―４　年間行事予定
（1997年度，土佐自然学園）

| 月 | 学校行事等 | 保健・安全 | 進路指導等 | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 光の村全体会<br>新任式・離任式<br>入寮式・始業式<br>入学式<br>避難訓練 | 身体測定<br>定期健康診断<br>給食関係調査<br>ツ反応・歯科検診<br>安全点検 | 関係機関との連携<br>進路懇談会<br>希望調査 | 各地区親の会<br>光の村養護学校土佐自然学園後援会総会 |
| 5 | 強歩大会<br>親子合宿<br>第１回家庭学校<br>落成式 | 身体測定・背柱検査<br>聴力・色覚検査<br>歯みがき指導<br>ぎょう虫検査<br>ﾋﾟｸｽｺｰﾌﾟ・ﾛｰﾙ指数まとめ | 進路希望調査(1)<br>専攻科現場実習<br>高３　〃 | |
| 6 | プール開き<br>避難訓練 | 身体測定<br>人工呼吸法・救急法<br>プール消毒<br>飲料水検査 | 職業相談（職安）<br>職業適性検査<br>（障害者職業ｾﾝﾀｰ）<br>専攻科現場実習 | |
| 7 | 体力運動能力測定<br>終業式 | 身体測定<br>プール消毒<br>安全点検 | 拡大ケース会議<br>専攻科現場実習 | 鏡川まつり |
| 8 | 夏期合宿・遠泳大会<br>期末懇談会<br>第２回家庭学校<br>後期特別合宿 | 要精密・治療のすすめ | 家庭から実習 | 光の村養護学校土佐自然学園後援会役員会 |
| 9 | 始業式<br>プール納め<br>避難訓練 | 身体測定<br>プール消毒<br>安全点検 | | 愛護作品展<br>馬路心臓取りﾌﾙﾏﾗｿﾝ大会 |
| 10 | 体育祭・秋期文化祭<br>中学部卒業旅行<br>体験入学 | 身体測定<br>ﾛｰﾙ指数まとめ<br>定期健康診断 | 専攻科現場実習 | |
| 11 | 高等部卒業旅行<br>入学選考<br>室戸サイクリング<br>避難訓練 | 身体測定<br>安全点検<br>かぜ予防の指導 | 専攻科現場実習<br>高３　〃<br>就職内定 | |
| 12 | 体力運動能力測定<br>入学者決定<br>学習発表会・作品展<br>終業式・期末懇談会<br>第３回家庭学校 | 身体測定<br>飲料水検査<br>要精密・治療のすすめ | 専攻科現場実習<br>高３　〃 | 県障研作品展<br>光の村養護学校土佐自然学園後援会役員会 |
| 1 | 始業式<br>避難訓練 | 身体測定<br>マラソン健康診断 | | 土佐市駅伝大会 |
| 2 | 短縮マラソン大会<br>フルマラソン大会 | 身体測定 | | |
| 3 | 体力運動能力測定<br>春季文化祭<br>学習発表会・成人式<br>卒業式・終了式<br>期末懇談会<br>第４回家庭学校 | 身体測定 | 入社・入所 | 光の村養護学校土佐自然学園後援会役員会 |

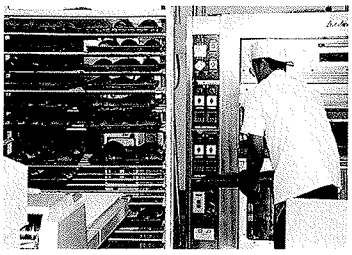
（出典：光の村養護学校土佐自然学園『平成９年度　学校要覧』p. 10）

資料Ⅱ―５　技術教育コースの設備と教育

| 技術教育コース | 面積 | 建物 | 設備と教育 |
|---|---|---|---|
| 紙器コース | 844.93㎡<br>193.20㎡ | 鉄骨造鋼板葺２階建<br>軽量鉄骨ｽﾚｰﾄ鋼板葺平屋建 | 紙器加工および印刷に関する基礎的な技能・技術の教育を行う。 |
| 製菓・製パンコース | 107.20㎡ | | 製菓・製パンに関する基礎的な技能・技術の教育を行う。 |
| 木工コース | 247.5 ㎡ | 鉄骨造ｽﾚｰﾄ葺平屋建 | 木工工芸に関する基礎的な技能・技術の教育を行う。 |
| 鉄工コース | 64.8 ㎡ | 軽量造鋼板葺平屋建 | 鉄工、溶接、研磨等についての基礎的な技能・技術の教育を行う。 |
| 自動車板金塗装コース | 115.5㎡ | 鉄骨造ｽﾚｰﾄ葺平屋建 | 自動車の板金・塗装技術、修理技術に関する基礎的な教育を行う。 |
| 農業コース | 2.12 ha | 牧場・農園・作業場 | 牧場、農場、果樹園等の栽培、飼育管理、乳製品加工に関する基礎的な技能・技術の教育を行う。 |

（出典：光の村養護学校土佐自然学園『平成９年度　学校要覧』p. 5）

写真Ⅱ―１　パン工場での現場実習



（1997年９月12日の訪問調査の際に筆者撮影）

ところで，高等部５年（ないし中学部を含めた８年）一貫教育が目指されてはいるが，卒業年度別の専攻科進学状況[29]は，1990年度：４／５人（専攻科進学率80％，離学者の内訳は授産施設１人），1991年度：６／10人（60％，就職４人），1992年度４／７人（57％，作業所１人・就職２人），1993年度：９／11人（82％，就職２人），1994年度：５／８人（63％，就職３人），1995年度：５／５人（100％），1996年度：４／６人（67％，授産施設１人・自営業１人）であった。７年間の合計で，専攻科への進学率は71％（37／52人，本科卒業時点での離学者15人）であり，就職可能者の一部は本科卒業時点で離学する場合もある。なお，同じ７年間で専攻科を卒業した36人の進路状況[29]は，就職18人（50％）・更生施設13人（36％）・作業所３人（８％）・授産施設１人（３％）・在宅１人であった。

（２）生徒の育ち

専攻科生の具体的な育ちは以下のようである。

①1995年の専攻科卒業生

専攻科卒業生３人（男子２人・女子１人）ともに，療育手帳の障害程度は重度であったが中学部からの一貫教育であり，専攻科では「体力」「作業能力」の向上が見られたという。卒業後の進路は，就職１人，入所施設１人，在宅１人であった[30]。

②1996年の専攻科卒業生

専攻科卒業生11人（男子７人・女子４人）中，重度５人・中度４人・軽度２人であったが，本科３年生で転入してきた１人を除いて10人は良好な成長が認められたという。具体的には，「情緒が安定」「体力の向上」「器用さ」「生活のみだれが改善」「パニックが少なくなり，仕事につけるようになった」などが特記されていた。卒業後の進路は，就職５人，通所施設２人，入所施設４人であった[30]。

③1997年の専攻科卒業生

専攻科卒業生４人（男子４人）ともに障害の程度は中度であったが，卒業時には全員が就職した[30]。４人全員に良好な成長が認められ，「情緒の安定」「体力の向上」「調整力」「持久力」「落ちつき」が特記されていた。

以上，技術教育をめざした教育課程及び４本柱の指導の徹底を通した「鍛錬」に重きが置かれていることが分かる。

## Ⅲ，学校法人旭出学園・旭出養護学校（東京都練馬区）
### ―生産人の自覚を持って心豊かな生活ができる人をめざす教育課程―

### １）教育課程の特色

1950（昭和25）年に東京・目白の徳川邸内に私塾的な学園として発足（創立者・三木安正）し，各種学校「練馬生活学校」（1958年）を経て，1960年に学校法人・旭出学園が認可されて正式な養護学校となった。当初から小・中・高等部を併設し，18歳までの継続した生活教育を目指した。「一般社会に巣立っていくことがむずかしい人にはできるだけ長期にわたって世話のできる学園にしよう，そして将来はこの人たちが自分の力を十分発揮してのびのびと生活できる小社会を作りたいという願い[31]」から「卒業のない学園」が構想され，1962年より練馬区東大泉に順次移転した後，

資料Ⅲ－1　旭出養護学校における「教育のプログラム」

| | 幼稚部 | 小学部 | 中学部 | 高等部・専攻科 |
|---|---|---|---|---|
| 生活教育 | 身辺生活の自立<br>・基本的習慣<br>・意思の表示<br>・生活の軌道 | 集団生活への参加<br>・自分と他人との関係理解<br>・集団生活の規則の理解<br>・ゲームのルールの理解<br>・集団内での位置と役割<br>社会生活の理解と参加<br>・学校生活の理解<br>・家庭生活の理解<br>・社会への関心<br>・自然への関心<br>・地域社会の理解<br>・地理的歴史的理解 | 生活の常識と技術<br>・度量衡<br>・時間暦<br>・天候<br>・保健衛生<br>・交通<br>・経済生活 | 生産人としての自覚<br>・遊びと仕事の分化<br>・作業意欲の高揚<br>・作業態度の形成<br>・作業課程の理解<br>・生産への責任 |
| 言語 | | | | |
| 数量 | | | | |
| 音楽 | | | | |
| 図工 | | | | |
| 体育 | | | | |

（出典：学校法人旭出学園『旭出養護学校要覧　平成９年６月』p. 4）

授産施設等（1972年：社会福祉法人富士旭出学園・富士厚生園［静岡県］，1974年：社会福祉法人大泉旭出学園・旭出生産福祉園［養護学校に隣設］，1986年：大利根旭出福祉園［千葉県］）の福祉施設を整備しつつ，1979年に幼稚部及び専攻科が認可され，専攻科校舎の落成を待って1981年に専攻科を開設した。また，旭出学園教育研究所を1960年から併設し，一人ひとりの個人差・課題に配慮した指導法を探究してきた。その結果，確立されたのが資料Ⅲ－1に示す幼稚部から専攻科に至る「教育のプログラム」であり，「身辺生活の自立―集団生活への参加―社会生活の理解と参加―生活の常識と技術―生産人としての自覚」という構造であった。

まず，旭出養護学校の教育目標は，「生産人の自覚を持って，心豊かな生活ができる人」である。「生産人」とは「単に仕事ができる人と言うのではなく，目標を持って充実した生活のできる人[32]」のことであり，1)自己表現，2)自立・自律，3)考え・判断する力，4)健康な体の４本柱で考えられている。そして，以下のような指導方針[33]が立てられている。

資料Ⅲ－2　旭出養護学校の時間割表（1997年度）

幼稚部・小学部

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:20 | 朝の支度 | | | | | |
| 9:40 | あそび | | | | | |
| 10:05 | 清潔（手洗い・うがい） | | | | | |
| 10:20 | 朝の会・朝の歌・朝の体操 | | | | | |
| 10:55 | 表現 | 総合（ふっけよと）<br>図工 | 総合 | 体育 | 音楽 | 総合（ふっけよと）<br>総合 |
| 12:00 | 昼食 | | | | | |
| 1:00 | 課題学習（数量） | 課題学習（言語） | 課題学習（数量） | ホームルーム | 課題学習（言語） | ホームルーム |
| 1:45 | 帰りの支度<br>ホームルーム | | | | 帰りの支度<br>ホームルーム | |
| 2:40 | 下校 | | | | | |

中学部

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8:55 | 朝礼 | 朝の支度・体操 | | | | |
| 9:40 | 朝の会 | | | | | |
| 10:10 | リズム・ダンス | 総合 | 総合（見つけよと） | リズム・ダンス | 総合（見つけよと） | 総合 |
| 10:40 | 作業 | 自然や生活の内容 | 作業 | 課題学習（言語） | 作業 | 社会の内容 |
| 11:00 | | | | | | 体育 |
| 12:00 | 昼食・昼休み | | | | | |
| 1:00 | 課題学習（数量） | 総合 | 課題学習（言語） | クラブ活動 | 課題学習（数量） | ホームルーム |
| 2:00 | 体育 | 音楽 | 図工 | | 音楽 | |
| 3:00 | 帰りの支度・ホームルーム | | | | | |
| 3:30 | 下校 | | | | | |

高等部本科

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8:55 | 朝礼 | マラソン・体操 | | | | |
| 9:50 | ホームルーム | | | | | |
| 10:00 | 総合 | 総合（生活） | 総合 | | | 作業 |
| 10:30 | 作業 | | 作業 | 環境整備 | 体育 | |
| 12:00 | 昼食・昼休み | | | | | |
| 1:00 | 作業 | 体育 | 作業 | クラブ活動 | 音楽 | ホームルーム |
| 2:00 | | 総合 | | | 図工 | |
| 3:00 | 帰りの支度・ホームルーム | | | | | |
| 3:30 | 下校 | | | | | |

高等部専攻科

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8:55 | 朝礼 | マラソン・体操 | | | | |
| 9:20 | ホームルーム | 体育 | ホームルーム | | | |
| 10:00 | 作業 | ホームルーム | 作業 | 総合 | 総合（調理） | 環境整備 |
| 10:30 | | 総合 | | 作業 | | |
| 11:30 | 乗間体操 | | 乗間体操 | | | 総合（買い物） |
| 12:00 | 昼食 | 昼休み | | | | |
| 1:00 | 作業 | 作業 | 作業 | クラブ活動 | 総合（調理） | ホームルーム |
| 2:00 | | | | | 総合 | |
| 3:00 | ホームルーム | | | | | |
| 3:30 | 下校 | | | | | |

（出典：学校法人旭出学園『旭出養護学校要覧　平成９年６月』p. 6/8/10/12）

①幼児・児童・生徒の自主性を尊重し自発的行動を促す：子どもは自ら興味を持って物事に取り組む時に，最大の学習意欲を発揮する。教師は常に子どもたちが喜んでいきいきと楽しく取り組める，興味を引き出す活動を工夫する。
②心身のバランスのとれた発達を促す：教育課程は自己表現力・情緒・社会性・知的発達・運動機能等について，子どもがバランスのとれた全体的な発達をとげられるように十分配慮して，一日・一週間の時間割，年間及び６・３・３年間の教育課程を組み立てる。
③一人一人の特性，発達の様相に即した指導を行う：子どもは豊かな個性を持っており，しかも障害の様相が一人一人違う。従って，全ての子ども一人一人にあった教育プログラムが必要になる。個別指導のみならず，集団での一斉指導においても，常にそのことを考慮した指導を行う。
④一貫教育・生涯教育：幼稚部・小学部・中学部・高等部・専攻科，それぞれの集団の中で互いに影響しあい伸びる力を引き出しながら，同じ教育目標で指導を積み上げる。

次に，時間割表としては，資料Ⅲ―２のように，幼稚部・小学部，中学部，高等部本科，高等部専攻科の４種類が設けられている[34]。

①幼稚部・小学部：「身辺生活の自立」と「集団生活への参加」が，人間形成の土台となる大切なものとして，学校生活全体を通して行われる。時間割はゆったりと設定されており，１週間を通じて毎朝（9:40～10:05）帯状に「自由あそび」が設定され，手洗い・うがい（清潔）及び朝の会・朝の歌・朝の体操の後に，表現する喜びを味わう「音楽・図工・表現」，体を動かす喜びを味わう「体育」，考える喜びを味わう「総合」といった活動（10:55～12:00）が行われる。昼食をはさんで午後には，知的発達の基礎となる学習を系統的・継続的に行う「課題学習」が設けられている（月～水・金曜日）。

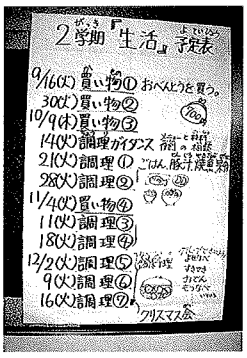
②中学部：「教育プログラム」における「社会生活の理解と参加」の比重が増して，「総合学習」にも社会・自然・生活の内容が盛り込まれる。加えて「生活の常識と技

資料Ⅲ－３　年間行事予定（1997年度，旭出養護学校）

| 月 | 全体 | 小学部 | 中学部 | 高等部 | 専攻科 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 9 入学式<br>14～6/19 定期健康診断<br>18 新入生保護者会<br>25 全体保護者会 | | | | |
| 5 | 7 防災訓練<br>9 学福合同保護者会<br>25 青葉のつどい<br>29.30 運動機能検査 | 1 遠足<br>13 小）保護者会 | 14 遠足<br>20 中）保護者会 | 14 遠足<br>19 高）保護者会 | 14 遠足<br>15 専）保護者会 |
| 6 | | 4～6 校内合宿 | 18～20 校内合宿（1年生） | 5 1年保護者会<br>12～13 校内合宿（1年生） | 12 3年保護者会<br>24～27 大利根合宿（3年生） |
| 7 | 19 終業式 | 8 小）保護者会 | 9 中）保護者会 | 7 高）保護者会 | 29～8/1 夏期合宿 |
| 8 | | | 22・23 登校日<br>24～28 塾山合宿 | 22・23 登校日<br>24～28 塾山合宿 | |
| 9 | 2 始業式 | 16 小）保護者会 | 11 中）保護者会 | 9 球技大会<br>17 高）保護者会 | 14 球技大会<br>18 2年保護者会 |
| 10 | 5 運動会<br>15.16 運動機能検査<br>23 公開見学会<br>25 学福合同保護者会 | 15～17 校外合宿 | 18 土曜参観<br>31 遠足 | 24～25 宿泊訓練 | |
| 11 | 5 防災訓練<br>23 勤労感謝祭 | 1 土曜参観 | | 28～29 宿泊訓練 | 6～7 旅行会<br>13 1年保護者会 |
| 12 | 20 終業式 | 2 小）保護者会 | 5 石神井交流会<br>9 中）保護者会 | 5 石神井交流会<br>8 高）保護者会 | 4 専）保護者会<br>5 石神井交流会 |
| 1 | 8 始業式 | 28.30 6年生中学部体験入学 | 14 新年会成人式<br>20～2/1 3年生高等部作業実習<br>21 バスケット大会 | 14 新年会成人式<br>23～24 宿泊訓練 | 14 新年会成人式 |
| 2 | 5 入学考査 | 19 小学部入学説明会<br>19 公開見学会 | 18 中学部入学説明会 | 6 バスケット大会<br>18 高入学説明会<br>20～21 宿泊訓練<br>23 2年進路面談 | 1 バスケット大会<br>26 専）保護者会 |
| 3 | 4 防災訓練<br>18 修了式・卒業式 | 4 小）保護者会 | 7 中）保護者会 | | |

（出典：学校法人旭出学園『旭出養護学校要覧　平成９年６月』p. 13）

写真Ⅲ－１　旭出養護学校における高等部専攻科「生活」




（1997年10月３日の訪問調査の際に筆者撮影）

術」の獲得も意識され始め，「総合学習」「課題学習（言語・数)」「体育」「音楽」「図工」の他に，「あそび」にかわって「作業学習」（手作りカレンダー，木製の汽車の玩具）が導入され，クラブ活動も始まる。

③高等部本科：「課題学習」が時間割から消え，「教育プログラム」における「生産人としての自覚」の形成を目指して「作業学習」の時間数が増す。「作業学習」は一人一人の生産の力や特性に対応できるように，体力を必要とするブロック・園芸作業，手先の器用さや根気が求められる手芸作業及びタイル工芸作業，納期や製品の完成度を要求される下請けの印刷作業の４作業種が用意されている。

④高等部専攻科：時間割は「作業」「総合」「体育」「環境整備」「クラブ活動」で編成されており，「作業」に最も多くの時間が配当されている。作業種は木工と紙工の２種類で，生徒の適性，希望，体力等を考慮してグループを編成し，基本的な作業態度・意欲・協調性等を養うことがねらわれている。また，「総合」の中には，調理・買い物を組み込んだ「生活」（写真Ⅲ―１）の枠が設けられている。

なお，旭出養護学校で予定されている年間行事は，資料Ⅲ―３のようである。

## ２）本科と専攻科との関連

### （１）教育課程の関連

専攻科は３年制であるが，進学者は少数であり，１～３年生合同の１学級（1997年度で１年生２人，２年生４人，３年生３人の計９人）で運営されている。学園全体として授産施設等の整備が進んでいるために本科修了時点での離学が基本となるが，施設への入所待ちやもう少し教育保障が必要な場合に専攻科に進学している。本科３年間で積み上げられたものを実際の生活の中で活かしながら指導が続けられるが，専攻科３年間の全課程を修了させる方針ではなく，個々の進路の状況や目的に応じて修了期間は異なる。こうした，本科修了時点では社会参加が未だ困難な層のいわゆる「落ち穂拾い」的な機能がこれまでは中心であった。

これに加えて，現在，旭出養護学校では，子どもから大人への育ちを支援する機能に着目して専攻科の新しい在り方を模索している。第一には，全国の養護学校専攻科で唯一３年制を採ることを活かし，成人式を迎える20歳をはさんでの「成人期」入り口の教育機能である。社会的に成人として大人の仲間入りをし，選挙権や障害基礎年金の受給資格を得るといった制度の変わり目において，成人としての初歩的・基本的な事柄を指導・援助しようというのである[35]。第二には，乳幼児期―学童期―思春期―青年期という発達過程における思春期問題への対応として，思春期の不安定さが長引いているケースについて専攻科を含めた継続的な指導・援助で不安定さを克服していこうというものである。第三には，進路のアフターケアの一環として，本科修了時に離学した者の再教育の為に短期の受け入れをしていこうというものであり，既に数例が試行されている。

資料Ⅲ－４　専攻科における教育内容の考え方

| 学習領域 | 家庭生活 | 社会生活 | 職場生活 |
|---|---|---|---|
| 作業 | | | ○ |
| 体育 | ○ | ○ | ○ |
| 総合 | ○ | ○ | ○ |
| 生活 | ○ | | |
| クラブ活動 | ○ | ○ | |

（旭出養護学校『1996年度公開見学会資料　専攻科の教育』p. 3から作成）

教育内容においても，家庭生活（身辺自立，家族の団らん，自由時間の過ごし方等），社会生活（交通機関や公共機関の利用，社会のマナーやルール等），学校生活（先生や友だちとの生活，卒業後は職場生活）の３つを意識して，資料Ⅲ―４に示すような関連構成

が打ち出されている。空いた職員寮を活用して寄宿舎を設け（1995年），寄宿舎での自立にむけた生活指導も始められている。

なお，卒業後における成人期の支援や豊かな生活保障の一環として，アフターケア組織「あおば会」（旭出関連施設に在籍していない卒業生・保護者及び教職員）があり，年10回ほどの余暇活動等も企画されている。

（2）生徒の育ち

専攻科生の具体的な育ちは以下のようである。

①1996年の専攻科卒業生

1993年３月の本科卒業生12人中，作業所入所３人，就職１人であり，専攻科には８人（67%）が進学した。しかし，１年生途中に１人，２年生途中に１人，２年生修了時に１人，３年生途中に１人の計４人（進学者の50%）が施設に入所できたために中退した。専攻科卒業生は結局４人（男子）であり，卒業後の進路は全員が通所施設であった。卒業生４人は，障害の程度は中度であったが，全員が専攻科での成長は良好であった。具体的には，「対人面の改善，仕事が好きになった」「情緒面の安定」「落ちつきが出た」「自信がついた」が特記されていた。

②1997年の専攻科卒業生

1994年３月の本科卒業生７人中，作業所入所２人，就職２人であり，専攻科には３人（43%）が進学した。しかし，２年生修了時に１人（施設入所）が中退し，専攻科卒業生は結局２人（男子１人，女子１人）であった。卒業生の卒業後の進路は２人ともに通所施設であった。卒業生の内，障害の程度が重度であった１人は普通の成長であったが，中度の１人は良好な成長が認められ，「落ち着き，持久力，体力がついた」と特記されていた。

③1997年度専攻科３年生

1995年３月の本科卒業生６人中，職業訓練校進学１人，就職２人であり，専攻科には３人（50%）が進学した。中退者はなく，1997年度現在で３人（男子）全員が専攻科の３年生に在籍していた。３人の障害の程度は重度が１人，中度が２人であったが，全員が良好な成長を示していた。具体的には，「自信がついてきた」「自己決定の力がついてきた」「情緒的に安定」と特記されていた。

以上，卒業後の「生活の質（ＱＯＬ）」にも配慮した「生産人」の形成の為に，20歳をはさんだ３年間の専攻科を，個々の課題に応じて継続教育機関ないし出入り自由な再教育機関として活用する新たな方向が読み取れよう。

## Ⅳ，学校法人日本水上学校・聖坂養護学校（神奈川県横浜市）
### —感性豊かな青年期前期の５年制高等部としての教育課程—

### １）教育課程の特色

聖坂養護学校は，キリスト教者・伊藤伝が創立した日本水上学校から転じて1967年に開設された。水上生活児から障害児の教育に替わったが，一貫して「公教育の谷間に居る児童[36]」を対象としてキリスト教の精神に基づく教育が追求されてきた。聖坂養護学校の教育の特色の第一は，キリスト教主義である。それは単に，日課に礼拝があり，年間の最大行事がクリスマスであるというに留まらない。キリスト教の精神を基盤とするとは，「イエス・キリストの御教えを道筋とし，神様から与えられた命を尊び一生懸命生きるという事である[37]」とされ，個々の生き方を大切にした方針が

**資料Ⅳ－1　聖坂養護学校の教育目標**

本校は、キリスト教の精神を基盤とし、知能遅滞の児童・生徒を対象に教育を行うが、児童・生徒の個々の個性に応じた指導を行い、可能な限り能力を伸ばし、心身機能の調和的発達を図り、身辺自立の習慣を身につけさせ、集団生活や社会への参加能力を育成する。このため以下の目標をおく。

(1) 家庭と協力し、生命に根源的に必要な食事、排泄、睡眠を是正し、生活の基本的なリズムを身につけさせる。
(2) 訴えたいことや話したいことを、身振りやことばで表わし、言語生活を広め、人間関係を豊かにする。
(3) 情緒の安定を図り、意欲的な生活態度を養う。
(4) 運動機能の向上を図り、運動能力を高め、身体の調和的発達をうながす。
(5) 自分の力で、身辺のことがらを処理する能力や態度を養う。
(6) 日常の生活の中で、健康や安全な生活に必要な態度や習慣を養う。
(7) 日常生活に必要な文字言語や数量についての基礎的知識をもたせ、それらを使用する能力を養う。
(8) 自然や身近な物事に関心をもち、それらを理解し活用する能力を養う。
(9) 学校や家庭、社会のきまりを知り、すすんでそれを守る態度を養う。
(10) あいさつなど礼儀をわきまえ、人と仲よく交わることのできる態度を養う。
(11) 表現活動を重んじ、創造力を養い、明るく伸びやかで個性豊かな人間性を養う。
(12) 家庭や学校における諸活動にすすんで参加し、自分の役割を果せるような技能や態度を養う。
(13) 労働に参加し、根気・集中力を養い働く喜びを知る。
(14) 人との関係を積極的に結び、集団で活動する力を養う。
(15) 自分自身の生活を設計し、主体的に生活する力を養う。
(16) 人を愛し、神を愛し、感謝の生活ができる人格を養う。

（出典：聖坂養護学校『聖坂養護学校要覧　1997年度』p. 5）

学校生活の中に自然な形で活かされている。キリスト教主義は教育目標にも明記されており，資料Ⅳ―1に示すように，16項目から構成されている。

第二の特色は，「オープンシステムによる指導[38]」である。聖坂養護学校のオープンシステムは1978年度から導入されたもので，以下の3つのオープン化[39]からなっている。

①クラスのオープン化：学級は生活年齢で編成して主に日常生活指導を行い，教科指導は各学部の中で学年の枠を取り払って発達段階や障害の内容に応じてグルーピングし，児童・生徒個々の個性に合った指導を行う。

②教師間のオープン化：クラスのオープン化を支える柱である。良い教育をするために，教師は自学級の枠に閉じ込もらずオープン化し，様々なことを共通に理解しなくてはならない。共に伝え合い，学び合い，高め合わなくては，オープンシステムは成り立たない。その意味では，オープンシステムには，日常的な自己研修の上に，厳しい教師間の突っ込んだ話し合いが必要となる。

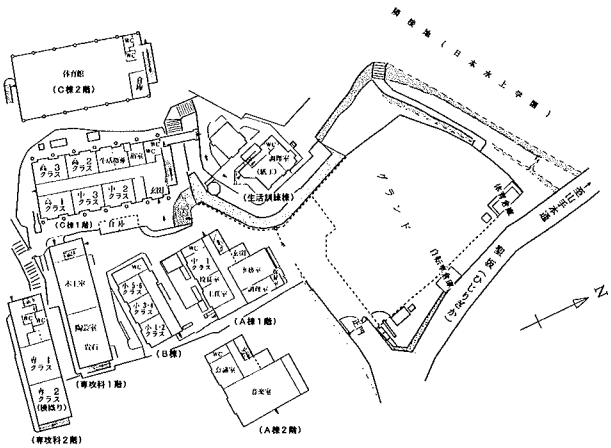
③学校のオープン化：学校のオープン化は，養護学校という性格上，地域とのつながりを持つ上で重要である。校外学習・地域との交流・ボランティア活動などが積極的に，また無理をしない自然な形で行われなければならない。

第三の特色は，発達の視点と生活力を高める視点との結合である。聖坂養護学校は，当初は小学部のみ設置していたが，小・中・高等部の一貫教育を行い，更に地域の障害児・者のためのセンター的な役割を果たせるような幅広い積極的な養護学校づくりを目指して1977年に「聖坂養護学校総合計画」を策定して，1979年に中学部，1982年に高等部本科，1985年に専攻科を開設した。これと並行して，養護学校教育の義務化に伴う重度化にも対応できるようにと，発達段階に応じた授業研究や指導がまずは盛んに取り組まれた。その成果として，「発達段階に応じた基本的な活動ステップ表づくり[40]」及び「発達段階に応じた言語指導ステップの構想表づくり[41]」「発達段階に応じた数量指導ステップの構想表づくり[42]」「発達段階に応じた生活指導ステップの構想表づくり[43]」が取りまとめられ，学校紀要に公表された。これに対して，中・高等部の開設によって生徒の暦年齢が長じてくるのに伴って，「発達の視点からだけでなく，生活力を高める視点，即ち，生活年齢に応じた指導が必要である[44]」との反省がなされたのであった。あまりにミクロ的な視点で子どもをみるのではなく，もっとマクロ的な視点に立って聖坂養護学校の教育目標の目指す「生活力を身につ

けさせ，高め強める[44]」という一点に，発達段階を踏まえた指導も含めた全ての指導を結び付けようという見直しであった。

上述の３つの特色は現在も引き継がれており，高等部にも当てはまる全体的な特色である。なお，校舎配置図は資料Ⅳ―２に示した。

資料Ⅳ－２　校舎配置図（1997年度，聖坂養護学校）




（出典：聖坂養護学校『聖坂養護学校要覧　1997年度』pp. 19-20）
注・なお、現在一部改築中である。

## ２）本科と専攻科との関連

### （１）教育課程の関連

1985年の専攻科の開設については，「高等部教育の充実にとって，教育年限の延長と，教育内容の充実は重要な二本の柱でありその為に専攻科の設置と作業棟の建設は是非必要となり，父母職員の悲願であった[45]」とさえ記録されている。教育年限の延長を基本理念として併設されたことから，聖坂養護学校では専攻科を含めて５年制の高等部ととらえ，高等部本科と一体となった運営を行っている。そのことは，1997年度の時間割表（資料Ⅳ―３）及び指導内容・指導形態（資料Ⅳ―４）からも分かる。高等部における教育課程の特色は，本科３年・専攻科２年を一貫させて「感性豊かな青年期前期の５年制高等部」として位置づけている点にある。

高等部の教育課程は，教科・領域を合わせた「総合学習」として日常生活指導・生活・基礎作業・体力作りが設定され，教科・領域別指導としての「教科」として体育・音楽・美術・言語・数量，「特別活動」としてクラブ・聖書・特別活動・学校行事が設けられている。朝の会・終わりの会にあたる前・後指導，給食指導，生活，美術，音楽，クラブは学年別の学級で行い，他は専攻科も含めて課題に応じてグルーピングして授業が行われる。他校の専攻科に比して，教科学習の時間が多いことが一つの特徴である。一方，基礎作業は１週間に１日設けられているのみで，紙工・木工・陶芸・機織・貴石研磨の５種目の中から生徒の適性に応じて２つを選び高等部教育５年でじっくり取り組むとされている。

資料Ⅳ－３　時間割表（1997年，聖坂養護学校）

(1) 小・中学部

| 時間 | 学級＼曜日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:40 10:20 | 学級別 | 前指導（あいさつ、連絡、講座） | | | | |
| 10:20 10:45 | 全学級 | 全校礼拝 | 全校リズム運動 | 小学部リズム運動 中体力作り | 全校リズム運動 | 小学部リズム運動 中体力作り |
| 10:45 11:05 | 小学部 中山 | 図工 | 音楽 | 体育 | 生活 | グループ学習 |
| | 小林 | 図工 | | | 生活 | |
| | 三上 | 図工 | | | 生活 | |
| | 中学部 岡口 | 数量／言語 I～IV グループ | 生活 | 音楽 | 美術 | 体育 |
| | 菅井 | | 生活 | | 作業 | |
| | 森 | | 生活 | | 作業 | |
| 11:45 | 学級別 | 給食 清掃・歯みがき | | | | |
| 13:25 | 小学部 中山 | クラブ | グループ学習 | グループ学習 | 生活 | クラブ |
| | 小林 | クラブ | | | 生活 | 作業 |
| | 三上 | クラブ | | | 生活 | 作業 |
| | 中学部 岡口 | クラブ 生活 | 数量／言語 I～IV グループ | | 作業 | 作業 |
| | 菅井 | 美術 生活 | | | 作業 | クラブ |
| | 森 | クラブ 生活 | | | 作業 | 美術 |
| 14:05 | 学級別 | 後指導 | | | | |
| 14:40 14:50 | | 移動・バス乗車 | | | | |

備考　1. 言語・数量は，各月交互にエポック授業として行う。
2. 全同リズム運動は小・中学部合同で行い，水・金は学部別で行う。
3. 小・中学部は，学部内オープンシステムで学習を行う。

(2) 高等部

| 時間 | 学級＼曜日 | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:40 | 学級別 | | 前指導 | | | | |
| 9:50 | | | （体力作り） | | | | |
| 10:10 10:30 | | | 前指導 | | | | |
| 10:45 | 本科 | 藤森 | 全校礼拝 | 基礎作業 陶芸 | 生活 | 体育Ⅰ | クラブ |
| | | 稲葉 | 音楽 | 基礎作業 木工 | 生活 | | 美術 |
| | | 佐藤 | | 基礎作業 機織 | 生活 | | |
| | 専攻科 | 高橋 | 美術 | 基礎作業 紙工 | 生活 | 体育Ⅱ | 音楽 |
| | | 福島 | | 基礎作業 貴石 | 生活 | | |
| 11:40 | 学級別 | | 給食指導 | | | | |
| 13:00 | 本科 | 藤森 | 数量／言語 I～V グループ | 基礎作業 陶芸 | 生活 | 美術 | 数量／言語 I～V グループ／聖書 |
| | | 稲葉 | | 基礎作業 木工 | 生活 | クラブ | |
| | | 佐藤 | | 基礎作業 機織 | 生活 | クラブ | |
| | 専攻科 | 高橋 | | 基礎作業 紙工 | 生活 | クラブ | |
| | | 福島 | | 基礎作業 貴石 | 生活 | クラブ | |
| 14:10 | 学級別 | | 後指導 | | | | |
| 14:19 | 随出 | | 特別活動 | | | | 特別活動 |
| 15:10 15:30 | | | 後指導 | | | | 後指導 |

備考　1. 前・後指導、給食指導、生活、美術、音楽、クラブは学級で行い、他の教科はグルーピングして授業を行う。
2. 「言語・数量」は、各月交互にエポック授業として行う。
3. 学部内（本科・専攻科）オープンシステムで学習を行う。

（出典：聖坂養護学校『聖坂養護学校要覧　1997年度』pp. 12-13）

「聖坂養護学校総合計画」の策定段階から全校を導き，中学部及び高等部の開設に熱心に取り組んできた柴田昌一[46]・第５代校長（1977年～）は，「本校高等部には２年制の専攻科があるのが特徴ですが，教育的に

**資料Ⅳ－４　指導内容と指導形態**

(1) 小・中学部

| 領域 | 科目 | | 指導内容 | 指導形態 |
|---|---|---|---|---|
| 教科・領域を合わせた指導 | 総合学習 | 日常生活指導 | ・身辺生活の処理に関すること。(衣服の着脱、食事、排泄、清潔、安全、睡眠、健康等)<br>・集団生活への参加に関すること。(あいさつ、遊び、応対、きまり、時間、行事、美化等)<br>・社会生活に関すること。(金銭、役割、責任、等) | ・学級別指導<br>(生活年齢) |
| | | 生活 | ・「生活」を核カリキュラム(基礎)を参考に、行事、季節、身近な課題の他、学校行事を取り入れて指導する。低学年は発達段階等を配慮し課題を設定する。 | ・学級別指導又は学部合同。必要に応じグループ指導 |
| | | 作業学習 | 小学部 清掃や植栽園芸を中心にしたお手伝い作業 | ・小学部は1年生以上を対象とし、学級別に行う |
| | | | 中学部 織物、陶芸、木工等を中心とした作業を通して手先の訓練、技術訓練や物を作り出す楽しさを加ねる。 | ・学級別指導<br>・作業種により合同又はグループ指導 |
| | 合同学習 | 運動・体力作り | 毎日学習前にリズムにのった軽い運動、曲に合わせて踊る、ハイハイ、歩く、走る等基礎的な動きやダンス、マラソンでは持久力、体力を養う。 | ・小・中学部合同学習 |
| | 教科 | 音楽 | 「音楽を習得する事柄段階」－「聞き音楽の段階」までの5つの指導段階に応じた系統的な学習。 | ・水・金は学部別 |
| | | 数学 | 教育の段階ステップ表を参考に、個々の認知の発達に即して、個別に指導をする。各小単位が個別を充分に配慮して指導する。 | ・中学部は、発達段階に応じグループ指導<br>・小学部は、発達段階・障害を配慮し個別に目標・特徴を設定して指導 |
| | | 手作訓練 | 主に、手・指先の訓練を行う。指先の操作性を高め、視覚・手耳れを育う。 | |
| | 領域別指導 | 図画・工作美(中学部) | 完成感・生活感を持った機能訓練(技術指導)と内的欲求を解放することにより情緒の安定を図る基礎的指導(表現指導)。 | ・学級別指導<br>・中学部は、専科教諭指導 |
| | | 音楽 | 技術指導と表現指導。主にリズム指導や歌唱を中心として。 | ・学部別指導<br>・専科教諭指導 |
| | | 体育 | 技術指導、表現指導、集団行動の基礎指導等。 | ・学部別指導内容によりグループ指導 |
| | 特別活動 | クラブ | 集会活動やスポーツ、文化的内容、聖書の時間を設ける。 | ・学級別・学部合同を含む |
| | | 学校行事 | 行事計画参照。 | ・学級別、学部、全校等 |

(2) 高等部

| 領域 | 科目 | | 指導内容 | 指導形態 |
|---|---|---|---|---|
| 教科・領域を合わせた指導 | 総合学習 | 日常生活指導 | ・身辺生活の処理に関すること。(衣服の着脱、食事、排泄、清潔、安全、睡眠、健康等)<br>・集団生活への参加に関すること。(あいさつ、遊び、応対、きまり、時間、行事、美化等)<br>・社会生活に関すること。(金銭、役割、責任、等) | ・学級別指導<br>(生活年齢) |
| | | 生活 | ・「生活」を核カリキュラム(基礎)を参考に、行事、季節、身近な課題の他、学校行事を取り入れ、指導する。低学年は発達段階・生活年令等を配慮し課題を設定する。 | ・学級別指導又は・学部合同。必要に応じグループ指導 |
| | | 基礎作業 | ・紙工・木工・陶芸・機織・貴石の中から生徒の適性に応じ高等部教育5年で2種目選択し、じっくり取り組む | ・グループ指導 |
| | | 体力作り | ・授業開始前のウォーミングアップ及び、持久力や生活力をつけることを目的に毛にマラソンを行う。 | ・学部合同 |
| | | 体育 | ・心身の健全な発達と体力の向上及び運動技能の向上を図る。<br>・技術指導、表現指導、集団行動の指導など。 | ・学部合同<br>(内容によりグループ指導) |
| 教科 | 音楽 | | ・音楽表現に必要な技能を身につけさせる目的で歌唱、器楽、鑑賞、身体表現等を行う。 | ・水曜・専攻科別<br>・専科教諭指導 |
| | 美術 | | ・造形的表現を通して表現する喜びを味合わせる。(絵画、彫塑、工作、鑑賞等) | ・学級・クラス合同<br>・専科教諭指導 |
| 領域別指導 | 算語 | | ・トータルコミュニケーションの立場から表現手段を与え、思考交換を豊かにする。 | ・グループ指導 |
| | 数量 | | ・「同じ」が分かる段階から「数量の認識が成用できる段階」までの5つの指導段階に応じて量と数、簡単な順序性数、簡単な計算、時間等生活に密着した数量指導をする。 | ・グループ指導 |
| 特別活動 | クラブ | | ・運動の趣味等生徒の実態に合わせて行う。<br>・生活科の補完として行う場合もある。 | ・学級別指導 |
| | 聖書 | | ・宗教行事の前指導を中心に、祈り、感謝、讃美の時間を持つ。 | ・学部合同 |
| | 特別活動 | | ・課外活動として、運動、文化活動等生徒の関心に合わせて実施する。 | ・自力通学可能な生徒を中心に |
| | 学校行事 | | 行事計画参照。 | ・行事毎グループ指導 |

(出典：聖坂養護学校『聖坂養護学校要覧　1997年度』pp. 14-15)

は専攻科も含めて５年制高等部と考えています。一般には，専攻科というと職業訓練を専門に行うものと考えられがちですが，本校は，そのような特別なプログラムがあるわけではありません。」と述べた後，「特に青年期前期は感性が豊かで，その後の人生の基礎的な情緒や人格をつくる大切な時期といわれています。この時期にどのような生活を送るかが，人格形成に大きな影響を与えるのです。（中略）感性豊かなこの時期，ゆったりと豊かで充実した生活を送らせることができればと考え専攻科を設置したのです。」との見解を明らかにしている。そして，「本校高等部の課題としては，むしろ職業訓練より社会への移行期間として，個別のニーズに応じて幅広い社会生活スキル訓練の実践にあると考えております。／具体的には，様々な家庭生活スキルをはじめ，移動（交通）スキル，買い物スキル，地域の施設など社会資源の活用スキル，地域の友人関係，経済生活スキル，余暇スキルなど地域生活に必要な生活スキル訓練です。」という注目すべき言及を行っている。

校長に留まらず，同様の見解は進路指導担当者[37]にもうかがえ，「本校の高等部は５年制であり，その教育の目標は，生活力を高め自立する力を養うことにある。もう少し補足すると，創造的・主体的に他者と協力できる力，つまり他者からの呼び掛けに対して主体的に応える力（＝自立）を養うことにある。決して社会に適応するという狭い意味での自立ではない。本校教育は児童・生徒の全面発達を目指しているのである。」との記述もみられる。

（２）生徒の育ち

専攻科生の具体的な育ちは以下のようである。

①1995年の専攻科卒業生

1993年３月の本科卒業生10人中，施設入所が１人あり，専攻科には９人（90％）が進学した。中途退学はなく，９人（男子６人，女子３人）全員が専攻科２年間の課程を修了した。卒業後の進路は，通所施設３人，無認可の作業所６人であった。専攻科卒業生９人中，障害が中度の者は１人で他の８人は重度の者であったが，７人に専攻科での良好な成長が認められたと言う。具体的には，「落ち着いてきた」「経験が豊かになった」「逞しい生活力」「コミュニケーションの向上」「経験と社会性の向上」「自信がついた」等が特記されていた。

②1996年の専攻科卒業生

1994年３月の本科卒業生10人中，施設入所が１人あり，専攻科には９人（90％）が進学した。他校から専攻科への進学者が１人あったが，施設入所の為に中途退学が１人あり，９人（男子５人，女子４人）が専攻科を卒業した。卒業後の進路は，就職１人，通所施設２人，入所施設１人，無認可の作業所５人であった。専攻科卒業生９人中，障害が軽度の者が１人，中度の者は１人で，他の

７人は重度の者であったが，７人に専攻科での良好な成長が認められたと言う。具体的には，「落ち着いた生活態度」「経験が豊かになった」「見通しをもった生活」「コミュニケーションの広がり」「社会性の向上」「生活力の向上」等が特記されていた。

③1997年の専攻科卒業生

1995年３月の本科卒業生10人の全員（100％）が専攻科に進学した。施設入所・通所の為に中途退学が２人あり，８人（男子３人，女子５人）が専攻科を卒業した。卒業後の進路は，就職１人，通所施設２人，無認可の作業所５人であった。専攻科卒業生８人中，障害が軽度の者が１人，中度の者は１人で，他の６人は重度の者であったが，７人に専攻科での良好な成長が認められたと言う。具体的には，「落ち着いた行動」「経験が豊かになった」「コミュニケーションが向上」「生活力の逞しさ」「自信がついた」等が特記されていた。

以上をまとめると，聖坂養護学校では他校に比して重度の生徒が多いこともあって，本科３年・専攻科２年の５年一貫教育によって，豊かな生活を築く力や逞しさの育成をめざしていることが分かる。

## Ｖ，学校法人大出学園・若葉養護学校（群馬県勢多郡宮城村）
### —赤城南麗の広大な自然環境を生かした実践の模索—

### １）教育課程の特色

大出文子・初代理事長の永年にわたる準備の下に，ようやく1993年に学校法人が認可され，1994

資料Ｖ－１　教育課程及び授業時間数
（1997年度、若葉養護学校）

| 週授業時数 / 領域・教科 | | 学科 / 学年 | 本科 1年 | 本科 2年 | 本科 3年 | 専攻科 1年 | 専攻科 2年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 領域・教科を合わせた指導 | 日常生活の指導 | | 6 | 6 | 5 | 5 | 5 |
| | 作業学習 | （家　政コース）<br>（農園芸コース）<br>（染　織コース） | 16 | 16 | 22 | 23 | 23 |
| | 生活単元学習 | | 4 | 4 | — | — | — |
| 教科別・領域別指導 | 保健　体育 | | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 |
| | 音　　楽 | | 1 | 1 | 1 | ※　1 | ※　1 |
| | 美　　術 | | 1 | 1 | 1 | | |
| | クラブ活動 | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 週授業時数合計 | | | 32 | 32 | 32 | 32 | 32 |
| 年間授業時数 | | | 1120 | 1120 | 1120 | 1120 | 1120 |

〔備　考〕
1．　一単位時間は５０分とする。
2．　教科・領域を合わせた指導として、日常生活の指導、作業学習、生活単元学習を行う。
3．　作業学習は、家政コース、農園芸コース、染織コースの３コースとし、いずれか１コースを選択し、履修する。
4．　専攻科の音楽・美術の週授業時数（※印）については隔週で、音楽又は美術の授業を行うものとし、年間授業時数は各学年とも両教科を合計して３２単位時間とする。

（出典：若葉養護学校『平成９年度　学校要覧』p. 4）

資料Ｖ－２　時間割表（1997年度，若葉養護学校）

本科１／２／３年

| ＼ | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ホームルーム・日常生活の指導 | | | | |
| 2 | 保健体育 | 体育（本3・作業） | 音　楽 | 日生（本3・作業） | 美　術 |
| 3<br>4 | 作業学習 | 生活単元学習（本3・作業学習） | 作業学習 | 生活単元学習（本3・作業学習） | 作業学習 |
| | 昼　食　指　導 | | | | |
| 5<br>6 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 |
| 7 | | クラブ活動 | | 保健体育 | |

専攻科１／２年

| ＼ | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ホームルーム・日常生活の指導 | | | | |
| 2 | 保健体育 | 作業学習 | 音楽・美術 | 作業学習 | 作業学習 |
| 3<br>4 | 作業学習 | | 作業学習 | | |
| | 昼　食　指　導 | | | | |
| 5<br>6 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 | 作業学習 |
| 7 | | クラブ活動 | | 保健体育 | |

※　音楽・美術は隔週

（出典：若葉養護学校『平成９年度　学校要覧』p. 5）

資料Ｖ－３　授業科目の概要（1997年度，若葉養護学校）

本科

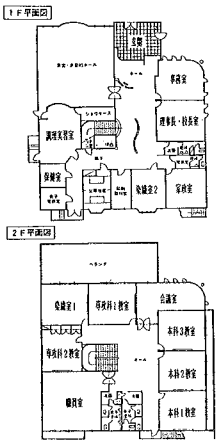
| | 授業科目の名称 | 概要 |
|---|---|---|
| 領域・教科を合わせた指導 | 日常生活の指導 | 指導を通して，個々の望ましい生活習慣の形成を図る。<br>生徒の日常生活が充実し，高まるように日常生活の諸活動を援助する。<br>衣類の着脱，調節，整理，洗面，手洗い，食事，清潔，身繕づかい，礼儀作法等の基本的生活習慣や集団生活をする上で必要な知識について，生徒一人一人の発達段階や障害の状態に応じて指導する。 |
| | 作業学習 | 職業生活をする上で必要となる一般的な知識，技能及び態度を身に付ける。個々の生徒の能力・特性により，次のコースから選択する。 |
| | 家政 | 家庭生活において，必要な基本的生活習慣を身に付ける。<br>将来の充実した衣・食・住のための生活設計，被服の製作並びに管理，調理等について指導する。 |
| | 農園芸 | 土や水等を相手にしての素朴な活動を通して，自然に親しむとともに健康の増進を図り，併せて手指機能の向上と巧緻性を養う。<br>作物，野菜，果樹や草花の栽培方法，管理等について指導する。 |
| | 染織 | 染織についての理解を深め，染織器具の適切な操作を習得する。<br>染織に使用する天然ハーブなどの草花の栽培，染織器具の操作，製品の管理，布製品の製造方法について指導する。 |
| | 生活単元学習 | 生活に基づいた目標や課題を達成するための活動に取り組ませ，個々の生徒の生活経験の拡大と生活能力を高める。<br>年間に行われる学芸的行事・体育的行事等を単元として取り上げて，学習する。 |
| 教科別・領域別の指導 | 保健体育 | 適切な運動の経験を通して，健康の増進と体力の向上を図り，楽しく明るい態度を育てる。 |
| | 音楽 | 音楽についての興味や関心を持たせ，豊かな心情を育てる。 |
| | 美術 | 造形活動を通して個々の興味，関心を持たせ，表現力を高める。 |
| | クラブ活動 | 指導を通して，集団の一員としての自覚，協力する態度，自主性を育てる。<br>文芸，運動，音楽，工作などのクラブ活動を通して，生涯にわたる豊かな趣味や特技などを育てるとともに，情緒の安定と健全な精神を確立する。 |

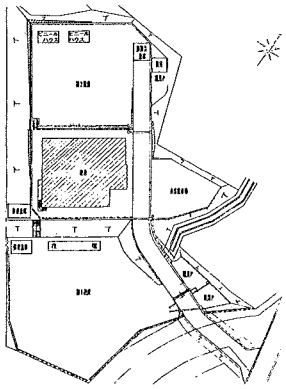
専攻科

| | 授業科目の名称 | 概要 |
|---|---|---|
| 領域・教科を合わせた指導 | 日常生活の指導 | 高等部（本科）での内容を基礎として，さらに個々の望ましい生活習慣の形成を図る。 |
| | 作業学習 | 勤労の意義を理解させるとともに，職業生活に必要な能力を高め実践的な態度を育てる。（本科と同様にコース選択制とする）<br>日常生活における実践的態度を習得する。 |
| | 家政 | |
| | 農園芸 | 物を作ることの喜びと仕事への意欲や自信を育てるとともに，作業に必要な知識や技能を養う。 |
| | 染組 | 染織の性質や特徴を知り，染織器具等の使い方に慣れ親しみ，正しい操作を学び巧緻性を養う。 |
| 教科別・領域別の指導 | 保健体育 | 適切な運動の経験や健康についての理解を通して，心身の調和的発達を図り，明るく豊かな生活を営む態度と習慣を養う。 |
| | 音楽 | 音楽の表現及び鑑賞能力を高め，生活を明るく，楽しいものにする態度と習慣を育てる。 |
| | 美術 | 造形活動によって，表現及び鑑賞の能力を高め，豊かな情操を養う。 |
| | クラブ活動 | 青年期の特性を考慮して，より一層自律的・自主的な，生活態度を養う。 |

（出典：若葉養護学校『平成９年度　学校要覧』pp. 7-8）

資料Ｖ－４　校舎配置図（1997年度，若葉養護学校）



（出典：若葉養護学校『平成９年度　学校要覧』pp. 15-16）

写真Ｖ－１　若葉養護学校の全景

（1997年７月14日の訪問調査の際に筆者撮影）

年（平成６年）に若葉養護学校（高等部本科・専攻科）が開設された。学校教育目標は「恵まれた自然環境の中で，生徒一人一人の能力や特性を考慮し，社会自立並びに社会への参加を目指して，心身ともにたくましく健全な人間を育成する」であり，具体的には明朗・自立・思いやり・健康・勤労の５つが設定されている。養護学校における高等部専攻科の開設では５校目であるが，学校自体の設置は７校中で一番遅く，学校そのものの歴史が浅いことから教育課程は創出途上にある。

資料Ｖ―１に教育課程及び授業時数を，資料Ｖ―２に時間割表を，資料Ｖ―３に授業科目の概要を示した。１週間を通して，毎日の３～６限目に作業学習（高等部本科１・２年生は生活単元学習を含む）が帯状に設定されており，週32時間中の20（63％）～26（81％）時間が配当されている。作業学習は，家政・農園芸・染織の３コースの内からいずれか１コースを選択履修する。農園芸・染織には地域の専門家を指導者として招き，また染織は近隣の草木を原材料とするなど，学校の位置する宮城村を中心とした地域とのつながりを追求しつつ，赤城南麗の広大な自然環境を生かした実践を模索している最中である。

なお，校舎配置図は資料Ｖ―４，全景は写真Ｖ―１のようであり，建築及び設備面でも充実の途上にある。

### 2）本科と専攻科との関連

（1）教育課程の関連

本科と専攻科との関連はまだ詳細に打ち出されてはいないが，専攻科では本科の内容を基礎としてさらに個々の望ましい生活習慣の形成を図り，職業活動に必要な能力を高めて実践的な態度を育てることなどが目指されている。

（2）生徒の育ち

専攻科生の具体的な育ちに関しては，回答が得られていないために不明である。

## Ⅵ，学校法人養護学校・聖母の家学園（三重県四日市市）

### —ゆったりとした時の中で人間性の完成をめざす教育課程—

### 1）教育課程の特色

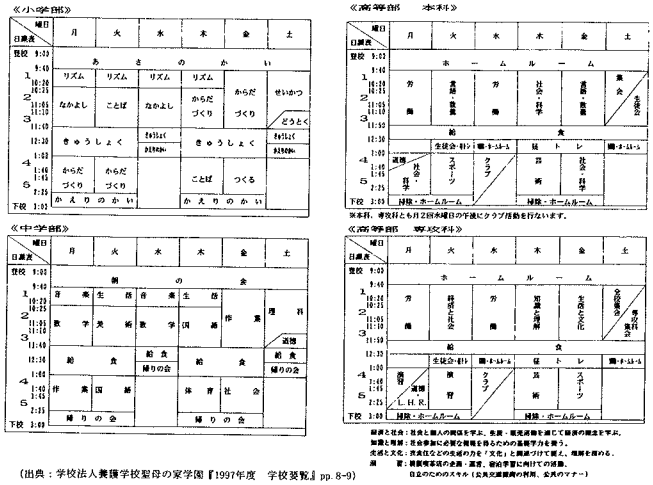
1971（昭和46）年に「精神薄弱児施設・聖母の家」内に，それまでの施設内学級を前身として養護学校聖母の家学園（小・中学部）が開設された。1987年度からは通学生の受け入れを始め，高等部を増設した。さらに，1992年に専攻科検討委員会を設けて準備を進め，1995（平成７）年に専攻科を開設した。その際，聖坂養護学校の柴田昌一校長を迎えて「豊かな青春時代を送らせるために」と題した講演会を開催するなど，聖坂養護学校の経験から多くを学んでいる。ただし，1997年度においてみれば，小・中学部は各５人（小学部１学級，中学部１学級として合同運営）と少数であり，一方で高等部本科は35人（４学級），専攻科は21人（２学級）と多い。聖母の家学園では高等部からの途中進学者が多数を占めており，それまでの各々の教育の蓄積の上に，高等部本科・専攻科の「５年間の高校生活[48]」を保障しようとしている。

資料Ⅵ－１　教育課程及び授業時間数（1997年度，聖母の家学園）

| 指導形態 | | 学部 | 小学部 | 中学部 | 高等部 本科 | 高等部 専攻科 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教科・領域を合わせた指導 | | 生活単元学習 | 4 | | | |
| | | 作業学習 | | 5 | 6 | 6 |
| 教科別の指導 | 教科別 | 生活 | 2.5 | 2 | | |
| | | 国語 | 4 | 4 | 3 | 2.5 |
| | | 算数・数学 | | 4 | 3 | 2.5 |
| | | 理科・科学 | | 2.5 | 3 | 3 |
| | | 社会 | | 2 | 3.5 | 4.5 |
| | | 音楽 | 4 | 2 | 1 | 1 |
| | | 図工・美術 | 2 | 2 | 1 | 1 |
| | | 保健・体育 | 9 | 2 | 2 | 2 |
| | 領域別 | 道徳 | 0.5 | 0.5 | 0.5 | 0.5 |
| | | 特別活動 | | | 3 | 3 |
| | | 合計 | 26 | 26 | 26 | 26 |

（出典：学校法人養護学校聖母の家学園『1997年度　学校要覧』p. 6）

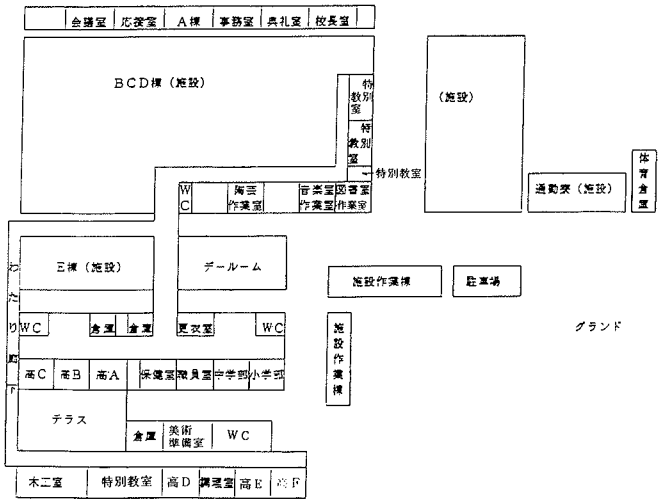
資料Ⅵ－２　時間割表（1997年度，聖母の家学園）




（出典：学校法人養護学校聖母の家学園『1997年度　学校要覧』pp. 8-9）

高等部本科は「特に思春期後期の情緒安定と生徒の能力に応じた社会参加を図り，個々の人間尊重を最大の教育目標」にしており，専攻科では「ゆったりとした時の中で人間性の完成を目指す」ことがねらわれ，「単なる職業訓練ではなく，個人の充実を図る」教育課程が追求されて

資料Ⅵ－３　校舎配置図（1997年度，聖母の家学園）




（出典：学校法人養護学校聖母の家学園『1997年度　学校要覧』p. 19）

いる[49]。ただし，自立に向けた指導が軽視されているわけではなく，民家を借り受けての家庭的な寄宿舎での生活指導，学園援護促進協議会が開所した小規模授産所「わかたけ萩の里」を活用した進路指導などもなされている。

資料Ⅵ－１に教育課程及び授業時間数を，資料Ⅵ－２に時間割表を示した。領域・教科を合わせた指導として生活単元学習（小学部）または作業学習（中学部・高等部）が，教科として生活・国語・算数（数学）・理科・社会・音楽・図工（美術）・保健体育が，領域別の指導として道徳・特別活動が設定されている。ただし，高等部では作業学習は「労働」に，教科に関しても本科では「言語・数量」「社会・科学」「芸術」「スポーツ」，専攻科では「経済と社会」「知識と理解」「生活と文化」「芸術」「スポーツ」「演習」にと，用語が置き換えられている。聖坂養護学校と同様に教科学習が大きく位置づけられているが，聖坂養護学校と異なって専攻科は本科と連携しながらも相対的に独自な教育課程を組んでいることが分かる。

なお，校舎配置図を資料Ⅵ－３に示すが，2000年を目標に新校舎建設の計画が進行している。

## ２）本科と専攻科との関連

### （１）教育課程の関連

聖母の家学園における高等部の教育課程は，隣県にあるＬＤ（学習障害）児の私塾校「見晴台学園」（1990年設立，田中良三園長，愛知県刈谷市，５年制高等部及び中等部［1995年度増設］）の実践[50]から大きな影響を受けている。見晴台学園では，高等部本科の３年間を「基礎教養教育」（青年期にふさわしい基礎教養を学び，自立へと高く飛ぶための準備），専攻科２年間を「職業準備教育」（社会に巣立つための準備として「考える手」を育み余暇の過ごし方や趣味など，生活を豊かにする力を学ぶ）と位置づけている。そして，「基礎教養教育」は「芸術と文化」「技術と人間」「運動文化とからだ」「自然と社会」「言語と数量」という５分野からなる教科学習と，ホームルーム・生徒会・自由課題研究・人間シリーズ・行事からなる教科外学習で構成され，専攻科の「職業準備教育」は「職業人教育」「趣味・特技を磨く」「宿泊生活学習」「卒業研究」「各種免許・資格への挑戦」「行事的教育への積極的参加」「グループ自主旅行」「研修旅行」で構成されている。

聖母の家学園では，1996年度までは専攻科の教科に関しても「言語・数量」など，本科と同様の名称を使用していた。これに対して，「本科と専攻科の違いがわからない」「本科に続く２年間の専攻科教育の独自性はどこにあるのか」等の問題意識から，第一期卒業生を送りだしたのを機会に1997年度には以下のように教育課程が改訂された[51]。なお，聖母の家学園では１・２・３学期制ではなく，前期・後期制を採っている。

①労働：本科・専攻科ともに共通の名称で設けられている。単に「集中力や根気を養う」「手先の巧緻性を培う」というだけでなく，「労働が新たな価値を生み出すこと」「労働によって手先の動きやことば，人間関係が発展してきたこと」等も押さえたいとしている。農園芸Ⅰ（木工・クラフト）は本科・専攻科の混合集団で，農園芸Ⅱ（陶芸・カレンダー）は本科のみの集団で，手芸は専攻科のみの集団で行われる。

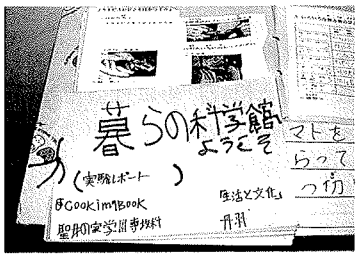
②演習：専攻科のみに設けられている。軽度から重度までを含む３グループ等質編成で行われ，年間を通じて生徒も担当教師も変わらない。模擬喫茶「マリアハウス」・茶席「まりあん」の企画・運営，電話のかけ方や公共交通機関の利用の学習を通じて，助け合い・金銭処理・清潔・社会的スキル等を学ぶ。また，前期・後期各１回ずつ「わかたけ萩の里」で宿泊学習を行う。

③知識と理解：それまでの「言語・数量」と「進路」の内の障害の理解，自己を知る学習にあたる部分として新たに設けられたもので，社会参加に必要な情報を得るための基礎学力を養う。到達度別のグループ編成で行われ，担当教師は前期・後期で入れ替わる。例えば，前期は放送番組の作成（テープ・ビデオカメラの使用），１冊の本を読み通す活動，後期は聖劇，放送番組作成，自分と障害についての学習等である。

④経済と社会：社会と個人の関係を学んだり，生産・販売活動を通じて経済の概念を学ぶことをねらっている。クッキーの製造販売，ウッディクラフト，ハーブの栽培と製品づくりという３つの活動があり，生徒の自主決定によりグループ編成を行う。このグループで，校外学習（映画・図書館・ボーリング・プラネタリウムなど生徒の希望で決定し，集合や解散時間を自主的に守る）やランチタイム学習（予算内で食事をする）を通じて，地域社会の一員としての行動も学ぶ。

⑤生活と文化：衣食住などの生活の力を「文化」に関連づけてとらえ理解を深める。この学習も生徒の自主選択によって進められ，自然（身近な自然の中に入って山菜・岩石等を採集し，学習を行う），食文化（クッキングブックづくりや食品調査などを通して，「食」を文化の面からとらえる），生活（有効なシミの取り方，衣服による体温の違いなど，身近な暮らしの科学を実験によって経験する）の３つのゼミから前期・後期に各々選択する（写真Ⅵ―１）。

写真Ⅵ―１　自主選択教科「生活と文化」の生徒作品




（1998年２月24日の訪問調査の際に筆者撮影）

⑥専攻科集会：生徒で討議・確認しながら理解を深めていくことを大切にしている。月１回の集会は，司会・資料づくり等を各クラス・学習グループ単位で交替して担当する。

⑦スポーツ：専攻科では，月１回のトレッキング（チャレンジ弁当持参）を含み，保護者とともに年１回の登山も行う。

高等部本科では基礎的なことが重視されているのに対して，専攻科では本科で身につけた「できる力」をさらに「理解してできる力」に深め，社会生活の中で生きた力となるように努めている。専攻科の教育目標[52]は，1）５年間の高校生活の豊かな経験を通して興味・意欲を高め，学びたい活動を自ら選択する力を育てる，2）集団の中での学習を通じて自己を理解し，新しい自分のイメージをつくり出す，3）地域の中で生き生きと働き，健康で文化的な生活を送るための具体的な力を育てる，の３つに現在のところ集約されている。

（2）生徒の育ち

①1997年の専攻科卒業生

1997年3月の卒業生が専攻科の第一期卒業生となる。具体的な育ちは以下のようである。

1995年3月の本科卒業生18人中，事業所就労が5人，作業所入所が1人あり，専攻科には13人（72%）が進学した。施設入所のために中途退学が1人あり，12人（男子9人，女子3人）が専攻科2年間の課程を修了した。卒業後の進路は，通所施設1人，入所施設4人，無認可の作業所5人，在宅1人（後に就職），自営業手伝い1人であった。専攻科卒業生12人中，障害が軽度の者が2人，中度の者が2人で他の8人は重度の者であったが，半数の6人に専攻科での良好な成長が認められたと言う。具体的には，「落ち着きが出た」「自信がついた」「対人関係」「就労意欲」等が特記されていた。

なお，第一期生の本科からの進学率72%は開科初年度で不確定要素が大きかったと推測されるが，第二期生以降の進学率は100%である。具体的には，1997年度の専攻科2年生は本科卒業生7人全員が進学し，他に外部からの専攻科進学者が2人，その後の専攻科中途退学者が1人（認可作業所）で，在籍者は8人であった。同じく専攻科1年生は本科卒業生12人全員が進学し，中途退学者が1人（無認可作業所）あり，在籍者は11人であった。

## Ⅵ，学校法人カナン学園・三愛学舎養護［高等］学校（岩手県二戸郡一戸町）
### —5か年の青年期教育：調和のとれた人間性の育成と卒業後の社会生活へのスムースな移行をめざした教育課程—

### 1）教育課程の特色

（1）教育課程の創出期

1972（昭和47）年に社会福祉法人カナンの園が認可され，翌73年に児童施設・奥中山学園が開園すると同時に地域の小・中学校での教育保障が実現した。キリスト教の教えの下に開始されたカナンの園の施設づくりの基本は，「子どもたちの成長発達の必要に応じて，拡がっていく施設づくり」「子どもたちの成長発達を保障していくために，運動体としての施設づくり」とされた[53]。子どもたちの成長発達の必要・保障を第一義とする取り組みの一環（5年毎に事業計画を立てて歩んできた第二期事業に該当）に，養護学校の開設も位置づくのである。すなわち，義務教育修了後のさらなる教育保障のために，続く74年には学園内に私設高等部が設けられ，数年の設立準備を経て1978年に高等部単置の三愛学舎養護（高等）学校が正式に開校したのである。

三愛学舎養護（高等）学校の建学の精神は，校名に象徴されている。「三愛学舎」との命名を行った本庄義雄（カナンの園の創立者の中心的な一人，学校法人カナン学園第二代理事長［1988～95年］，三愛学舎養護学校第四代校長［1992年～］）は，以下のように述べている。

「教育は，ただ単に生きていくことの小手先芸を教えることではありません。聖書の創世記に，“神は土で人を造り，命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きたものとなった。”とあります。神によって，命の息を吹き込まれた私たちが，まさに生きた者として活動すること，すなわち“何によって生きるかを学ぶこと”が教育の根本になるのではないかと思います。人は，神から出て神にかえるものです。また，全てのものは土から出て土にかえるものです。“農は，人類の真固生業というべし，吾が寒に衣し，吾が飢に穀し，民生として憂なからしむ”（ダニエル・ウエ

資料Ⅶ－１　時間割表
（1987年度，三愛学舎養護学校）

| 時限 | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 8:45 | 登　校 | | | | | |
| | 8:45 | 朝　礼 | | | | | |
| | 9:00 | | | | | | |
| 1 | | 体　育 | | | | | |
| | 9:45 | | | | | | |
| | 9:50 | | | | | | |
| 2 | | 音楽 | 美術 | 音楽 | 美術 | 音楽 | 特活 |
| | 10:35 | | | | | | |
| | 10:45 | | | | | | |
| 3 | | 生活（調理）・文字ことば・数－３ｸﾞﾙｰﾌﾟに分かれて | | | | | 宗教 |
| | 11:30 | | | | | | |
| | 11:35 | | | | | | |
| 4 | | 生活（食事を中心として） | | | | | ＨＲ |
| | 12:20 | | | | | | |
| | | そ　う　じ | | | | | |
| | 12:35 | | | | | | |
| | | 昼　休　み | | | | | |
| | 13:35 | | | | | | |
| 5 | | | | | | | |
| | | 労働Ⅰ－木工・農業・縫工・窯業 | | | | | |
| 6 | | | | | | | |
| | | 労働Ⅱ－全員でする農業 | | | | | |
| 7 | | | | | | | |
| | 16:00 | | | | | | |
| | | 下　校 | | | | | |

（三愛学舎養護学校「三愛だより」第１号「1978年４月12日付け」より作成）

ブスター）農＝土です。神に語りかけ，互いに語り合い，土に語りかけ，そして，そこから多くのことを学ぶ学校でありたい。／『三愛学舎』は『神を愛し』『人を愛し』『土を愛する』三愛の精神をその名称の意味としています。[54)]」

私設高等部においては，まず1974年度[55)]には「基礎学習の継続と共に作業学習を大巾にとり入れることにより，労働に対する意欲を育て，社会自立へ近づける」ことを念頭に，ことば・かず・絵画工作・音楽リズム・体育・家政・社会自然・作業が設けられた。1975年度[56)]には，「心の中にあることを，充分にのびのびと表現し，その積み重ねの中で自分で何かを創り出そうとする気持を高め，自分の身体を逞しくしていく力を養い，自分の考え，意志で行動できる力を身につける」「意志伝達力（読む，書く，聞く，話す），数量的概念の拡大を図り，生活感覚の拡大や，よりよい人間関係の維持をめざし，巾広い生活範囲を築く中で生産労働にたずさわる力を身につける」というように教育目標も細かくなり，ことば文字・かず・絵画工作・音楽・体育・労働Ⅰ（窯業・織物）・労働Ⅱ（農作業）・生活が設けられた。労働は「日常生活と深い関わりをもった教科学習」の中に総合的に位置づけられ，「共に働き共に学ぶ仲間を思いやり，仲間全体の力を高める過程である」ことが意図されたのである。

こうした私設高等部の蓄積の上に，1978年に開校された三愛学舎養護学校においては，「①生活する人，労働する人となるようがんばります。②つながり合い，育ち合う関係をひろげます。③青年期として充実した豊かな人間性をめざします。」の３本柱を目標に，資料Ⅶ—１のような時間割表で学習が行われたのであった[57)]。労働Ⅰの作業種が増えているのみで，ほぼ私設高等部の教育課程を踏襲し，加えて「労働教育から社会的労働への橋渡しの手立て[58)]」として職場実習も導入された。

（２）教育課程の改訂期

開校から６年目・養護学校義務化から５年目の1983年度[59)]，「高等部単立の養護学校であることから，社会的に要請されてくる機能（就労，社会自立）と，福祉施設との連携の中ではたすべき機能（発達促進・社会生活への基礎づくり）とが共存」する中，「ふたつを一貫する実践的な体系への模索」が続けられた。そして，1984年度に教育課程検討委員会[60)]が設けられ，教育課程の検討が開始された結果，教育目的が「就労最重点」に切り替えられたのであった。例えば，「缶つぶし，のれん作りの玉通しを基礎に作業訓練に力を入れたところ，働けない者はいなくなった。職業実習は１年生から３年生まで年３，４回（１回４，５週間）実施している。その成果は，今春の卒業生10人うちの３人が就職，２人が作業所に就労したことに表れた。[61)]」との談話が新聞報道されてい

る。1989年度からは「職業観」という課題で作業訓練が３・４校時にも入ってくる。

これに対して，1992年に第４代校長に就任した本庄義雄は，開校当初の「三愛学舎の教育のねらい（運営計画書）」と実際の教育実践に大きな隔たりができていると認識するに至り，1994年に「三愛精神に基づいた学習内容の充実」案[62]を提起した。例えば，運営計画書には「『労働』のねらいは，喜びのある労働として“自分たちが生きていく上で必要なものを自らの手でつくりだしていくこと”であった。この基本は，互いに生かし合う関係の中で，はじめて意味をもって実現された。」と書かれていたが，高等部は社会参加を前にした３年ということで，卒業後の具体的進路が常に課題としてあり，「職業自立のための教育」が大きな位置を占めざるを得ない状態になっていたと見る。そこで，「卒業後の自立が全てという教育ではなく，『生活・労働』を中心に豊かに生活する青年像（自己実現，全人格的発達）をめざしていた」三愛学舎の当初のねらいに立ち帰り，「知的障害を持つ故に，乏しくなりがちであった社会経験（人間関係・文化的な活動），身体的なゆがみや情緒面の不安定さなど，障害をもたないもの以上に人格的発達は疎外されている生徒たちの青年期教育を『人格的ふくらみ』あるいは『人格的成長』の機会として再構築していきたい」という願いに立って，高等部に２年間の専攻科を増設する提案を行った。ゆったりと地ならしと基礎的素養・個性の充実を図る本科３年と，その上に労働を中心として個々の生活確立を図る専攻科２年の「５か年の青年期教育」を通して，二律背反にとらえられがちであった自己実現と職業的・社会的自立とを共に追求しようという構想なのである。

## ２）本科と専攻科との関連

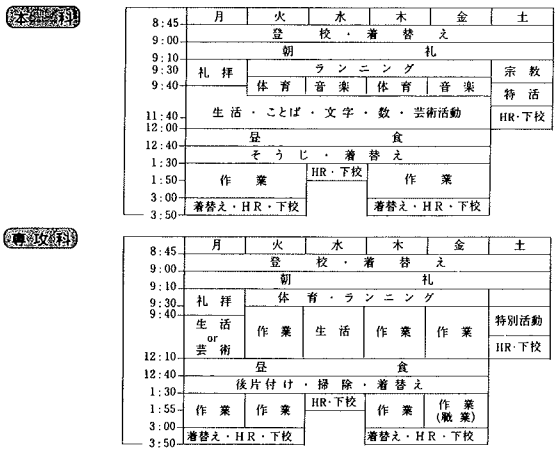
### （１）教育課程の関連

1997年度の時間割表を資料Ⅶ―２に示す。「基礎的素養・個性の充実」をねらう本科では，1)情緒の安定，身体機能の矯正，2)生活に関わる知識・技能の習得，3)表現力と創造性の促進，4)喜びと意欲のある労働，5)より広い社会生活体験の５つの観点から，体育・音楽及び生活・ことば・文字・数・芸術活動等が午前中に取り組まれ，作業は午後に週４日が設けられている。「個々の生活確立」をねらう専攻科では，1)労働を中心とした卒業後の生活試行，2)生活を豊かにする為の趣味の獲得と社会資源の活用の２つの観点から，作業を中心に体育・生活・芸術等が配されている[63]。

①作業（労働）：本科には受注生産・園芸・縫工・環境造成の４種目が，専攻科には受注生産・園芸（冬期の農産加工を含む）の２種目が設けられている。本科では「生命を育む，創造性，生活技術を中心として」の位置づけで「生活をつくる活動」の一環として取り組まれるのに対して，専攻科では「個々の生徒の卒業後の職業（作業）を見据えながら，労働に向かう姿勢・体力を培う」ことがめざされている。

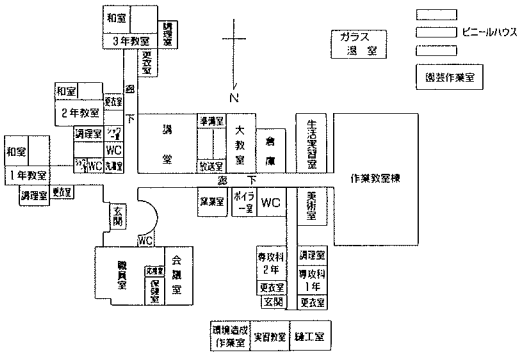
②職場実習：専攻科ができたことにより，本

資料Ⅶ―２　時間割表（1997年度，三愛学舎養護学校）




（出典：三愛学舎養護［高等］学校『1997年度　学校要覧』p.8）

資料Ⅶ－３　校舎配置図
（1997年度，三愛学舎養護学校）




（出典：三愛学舎養護［高等］学校『1997年度　学校要覧』p. 10）

写真Ⅶ－１　生活空間として台所もある教室

（1997年９月10日の訪問調査の際に筆者撮影）

科では３年生からの実施（個別に実習の必要が検討された場合は２年生でもありうる）に変更された。本科３年生は２学期に３週間，専攻科１・２年生は１学期・４週間，２学期・８週間，３学期・２週間の計14週間が行われる。本科１・２年生むけには，校内実習が２学期（９日間）に計画されている。ただし，就職第一主義ではなく，「権利としての労働」という観点から，障害の重い人を含めてカナンの園の全事業体系の中での労働保障が追求されている[64]。

③生活：「三愛学舎の教育は，生活・労働を動機として，自己実現していく人格をめざす」とされており，「『生活・ことば・文字・かず』のねらいは，生活上の『調理』を取り上げ，献立・買い物の活動と関連して，ことば・文字・かずの学習を積み重ねることが総合されて，生活に立ち向かう姿勢をつくりだしていき，この時間の中で育てられる姿勢は各自の全生活に波及して生きる原動力になっていく」ととらえられてきた[65]。毎日の自らの昼食づくりが学習活動として大きく位置づけられており，本科の時間割に表れている。本科は資料Ⅶ―３の校舎配置図に示すように，各学年別に生活空間が設計されており，教室・和室・調理室・更衣室がセットになって配置されている。この調理室を活用して，昼食づくり（あるいは校外活動の為の弁当づくり）が取り組まれる（写真Ⅶ―１）。

④体育：身体のゆがみの治療訓練の強化（専門家の協力を得て），身体各部の機能強化，保健（大人の身体を知る，性の学習）などの視点を含んでいる。火～金曜日（毎朝の時間帯）にランニングが行われる他に，山登り・沢歩き・フォークダンス・競歩なども取り組まれる。

⑤芸術（音楽を含む）：心身の解放，自己表現と創造性の促進，日常生活の豊かさ・潤いという視点で取り組まれている。専攻科においては，生活を楽しむ手だて（趣味・娯楽）の視点も加味される。

⑥特別活動：社会的参加と自主自立の視点で，生徒会活動・クラブ活動・男女交際などが含まれている。野外学習（キャンプ・野外炊飯・野焼き等），農業合宿，スキー合宿，クリスマス会，研修旅行（本科１・２年生，専攻科１年生）などが行われる。

⑦礼拝・宗教：校名に象徴されるように，キリスト教の精神に基づいて教育実践が展開されている。養護学校を含むカナンの園の全体の中で，「共に神の前に頭をたれた時，神の前には等しく罪ある者として存在している」「そのような私たちを，神は愛をもって，共に生かして下さっている」ということが基点となっており，障害を持つ人の中に受洗する者もいるという[66]。

ところで，1997年度においては，重点課題として「５ケ年の三愛学舎教育がより充実した青年期教育の場となるように，職員集団はもとより，保護者とも共有できるような『基本的カリキュラム』を作成する」ことが位置づけられていた。そして，具体的には，1)発達段階や生活年齢において，

どのような教育内容を選択整理し配列していくか，2)発達段階や生活年齢を考慮しつつどのような学習課題を設定し，どのように学習を展開していくか，3)認識の力，表現の力，身体の力などを系統的に育てる授業のあり方，4)育てたい感性や学習意欲に適した教材をどのように選んでいくか，が検討課題として掲げられていた。

（2）生徒の育ち

1997年度時点においては，まだ専攻科の卒業生を出していない。

専攻科在籍の生徒についてみると，2年生に関しては本科卒業生11人中の10人（進学率91%。1人は家庭の都合で近くの作業所に通所）が専攻科に進学していた。10人（男子6人・女子4人）の内，障害の軽度の者は2人，中度の者は7人，重度の者は1人であり，5人が専攻科での成長が良好であるとされていた。具体的には，「自信がついた」「落ち着いてきた」「生活態度も整ってきた」などが特記されていた。

1年生に関しては，本科卒業生12人中の11人（92%。1人は就職）が専攻科に進学していた。11人（男子10人・女子1人）の内，障害が軽度の者は4人，中度の者は5人，重度の者は2人であり，4人に良好な成長が認められたという。具体的には，「自信がついた」「生活が整ってきた」などが特記されていた。

## Ⅷ，高等部専攻科の教育課程の特色

### 1）専攻科の教育課程の類型

高等部専攻科を有する私立養護学校7校の一覧を表1に示した。私立養護学校の専攻科は，7校全てが普通科である。しかし，実態的には職業（技術・作業・労働など）の時間を多く位置づけている学校が少なくない。光の村養護学校・土佐自然の家，若葉養護学校，三愛学舎養護学校がそれである。このタイプを「職業教育中心の教育課程」と仮に呼称すれば，聖坂養護学校及び聖母の家学園は教科指導の時間を多く位置づけており，「教科教育中心の教育課程」と呼ぶことができる。これらに対して，いずみ養護学校及び旭出養護学校は生活や総合学習の時間が比較的多く設けられており，どちらかといえば「生活教育中心の教育課程」と呼べよう。

とはいえ，養護学校の教育課程研究において従来から行われてきたこうした類型化は，あくまでも相対的なものである。「職業教育中心」と言っても，文化・芸術活動や生活の豊かさを追求する学習も教育課程の中には含まれている。一方，「教科教育中心」と言っても作業や生活も教育課程には位置づけており，総合的な学習として追求している部分が大きい。

また，高等部教育の一環としての専攻科の特色を示す場合には，専攻科のみを切り出した類型化は誤解を与える。当該校の本科から続けて専攻科に進学するという実態を踏まえれば，本科3年との関わりにおいて専攻科をどのように位置づけているかということがより重要だからである。例えば，専攻科のみを取り出せば「職業教育中心の教育課程」のようにみえる三愛学舎養護学校は，本科においては教科教育や生活教育を重視しており，それとの関係で専攻科では労働に重きを置いているのである。

## 表１　高等部専攻科を有する私立養護学校一覧

（1998年，渡部作成）

| 学校名 | いずみ養護学校 | 土佐自然の家 | 旭出養護学校 | 聖坂養護学校 | 若葉養護学校 | 聖母の家学園 | 三愛学舎養護(高等)学校 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所在地 | 宮城県仙台市宮城野区安養寺２丁目１－１ | 高知県土佐市新居2829 | 東京都練馬区東大泉７丁目12－16 | 神奈川県横浜市中区山手町140 | 群馬県勢多郡宮城村大字苗ケ島2258－４ | 三重県四日市市波木町398－1 | 岩手県二戸郡一戸町中山字軽井沢49－33 |
| 設置年月日 | 1962年２月22日 | 1969年４月１日 | 1960年５月30日 | 1967年４月１日 | 1994年４月１日 | 1971年４月１日 | 1978年４月１日 |
| 特色 | 家庭科を中心に女子のみの高等部単置校で本科３年及び専攻科２年（コース制）の課程を設置。寄宿舎を付設し学校・寮の連携による教育実践を目指している。 | 中学部，高等部，専攻科８年制の精神薄弱養護学校。一人ひとりの必要にどこまでも応じきる生涯教育を組織する。能力と適性に応じた教育と自立の場を広げる。 | 昭和25年４月創立以来，小・中・高一貫した教育方針とそれに賛同する両親の協力により運営されている。 | キリスト教主義による愛と奉仕の精神を基盤としている。オープン化を進め，毎年秋に一般への公開授業を行っている。健常児との交流学習を行っている。 | 群馬県で初めての私立による知的障害児のための養護学校。高等部本科・専攻科を併設。職業教育に重点を置いた教育。 | カトリックの人間観と愛に基づいた教育。小・中・高一貫教育，特に専攻科で情操を高める。高等部での寄宿舎・家庭的雰囲気の中で個性を重んじた人格教育。 | キリスト教精神に基づいて，知的障害養護学校高等部本科３年，専攻科２年，計５年間の教育活動を通して，心身の充実発達に努めている。 |
| 校長名 | 米森　繁 | 西谷　寿子 | 平田　康子 | 柴田　昌一 | 青木　秋夫 | 穐山　アイ子 | 本庄　義雄 |
| 教職員 | ・教諭　17人<br>・養護教諭　1人<br>・常勤講師　1人<br>・寮母　6人<br>・事務職員　2人<br>・栄養士　1人<br>・一般用務　1人<br>・給食調理　2人<br>常勤教職員合計　31人 | ・教諭　17人<br>・養護教諭　1人<br>・寮職員　8人<br>・舎監　1人<br>・事務職員　2人<br>・給食調理　4人<br>・その他　？人<br>常勤教職員合計　37人 | ・教諭　21人<br>・養護教諭　1人<br>・常勤講師　2人<br>・寄宿舎職員　1人<br>・事務職員　3人<br>・給食調理　1人<br>・印刷，運転手　3人<br>常勤教職員合計　32人 | ・教諭　20人<br>・養護教諭　1人<br>・介助員　17人<br>・事務職員　4人<br>・給食調理　2人<br>・運転手　2人<br>・添乗員　3人<br>常勤教職員合計　49人 | ・教諭　10人<br>・養護教諭　1人<br>・常勤講師　2人<br>・助手　2人<br>・寮母　4人<br>・事務職員　2人<br>常勤教職員合計　21人 | ・教諭　15人<br>・養護教諭　1人<br>・常勤講師　1人<br>・舎監　1人<br>・寮母　2人<br>・介助員　10人<br>・事務職員　2人<br>・その他　3人<br>常勤教職員合計　35人 | ・教諭　16人<br>・養護教諭　1人<br>・常勤講師　3人<br>・事務職員　1人<br>常勤教職員合計　21人 |
| 学級数及び児童・生徒数 | 高等部　8学級86人<br>（内，寄宿舎46人） | 中学部　3学級19人<br>高等部　6学級50人<br>合計　9学級69人<br>（全寮［施設］制） | 小学部　3学級16人<br>中学部　3学級24人<br>高等部　3学級30人<br>合計　9学級70人<br>（内，寄宿舎２人） | 小学部　3学級24人<br>中学部　3学級24人<br>高等部　5学級48人<br>合計　11学級96人<br>（全員自宅通学） | 高等部　5学級34人<br>（内，寄宿舎24人，グループホーム８人） | 小学部　1学級５人<br>中学部　1学級５人<br>高等部　6学級56人<br>合計　8学級66人<br>（内，施設13人，寮５人） | 高等部　5学級54人<br>（内，施設25人） |

| 開設年 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 高等部 | 1962年 | 1969年 | 1960年 | 1982年 | 1994年 | 1987年 | 1978年 |
| | 専攻科 | 1969年 | 1975年 | 1981年 | 1985年 | 1994年 | 1995年 | 1996年 |
| 高等部の教育課程の特色 | | 家庭科中心教育課程 | 技術教育をめざした教育課程 | 生産人の自覚を持って心豊かな生活ができる人をめざす教育課程 | 感性豊かな青年期前期の５年制高等部としての教育課程 | 赤城南麓の広大な自然環境を生かした実践の模索 | ゆったりとした時の中で人間性の完成をめざす教育課程 | 調和のとれた人間性の育成と卒業後の社会生活へのスムースな移行をめざした教育課程 |
| 本科と専攻科との関連 | | ・本科卒業時点でできるだけ社会に出す方針<br>・本科卒業生の約半数が進学＋外部入学者数名 | ・５年制の青年期学校<br>・本科卒業生の約７割が進学（就職可能者の一部は離学） | ・「落ち穂拾い」的な機能<br>・思春期問題や成人期入り口への新たな着目<br>・短期の再教育の試行 | ・５年一貫制（本科卒業生のほぼ全員が進学）<br>・本科と専攻科の一体的な運営 | 詳細は不明 | ・５年一貫制（本科卒業生のほぼ全員が進学）<br>・本科とは異なる専攻科の独自性を模索中 | ・５年一貫制（同左）<br>・専攻科は労働を中心にして個々の豊かな生活確立をめざす機能 |
| 専攻科の教育課程の概要 | | 領域教科を合わせた指導<br>・日常生活の指導　4h<br>・生活　4h<br>・家庭　3h<br>・職業（２日／週）11h<br>（縫製・調理・紙工）<br>教科別の指導<br>・音楽　1.5h<br>・保健体育　2.5h<br>領域別の指導<br>・特別活動　2.5h<br>・道徳<br>・養護訓練<br>合計週時数　33h | 技術教育コース<br>・紙器<br>・製菓製パン<br>・木工<br>・鉄工<br>・自動車板金塗装<br>・農業 | ・作業(2日+半日2回/週)<br>（木工・紙工）<br>・生活(調理・買い物)<br>・総合<br>・体育<br>・環境整備 | 領域教科を合わせた指導<br>・日常生活指導<br>・生活<br>・基礎作業（１日／週）<br>（陶芸・木工・機織・紙工・貴石）<br>・体力づくり<br>教科別の指導<br>・体育<br>・音楽<br>・美術<br>・言語<br>・数量<br>特別活動(ｸﾗﾌﾞ・聖書・特別活動・学校行事) | 領域教科を合わせた指導<br>・日常生活の指導 4-2h<br>・作業学習　24-26h<br>（家政・農園芸・染織）<br>教科・領域別の指導<br>・保健体育　1h<br>・音楽　0.5h<br>・美術　0.5h<br>・クラブ活動　1h<br>合計週時数　32h | ・労働(半日２回／週)<br>（木工・ｸﾗﾌﾄ・手芸）<br>・演習<br>・知識と理解<br>・経済と社会<br>・生活と文化<br>・芸術<br>・スポーツ<br>・道徳<br>・特別活動<br>（生徒会・HR・集会等） | ・作業(3日+半日1回/週)<br>(園芸・受注生産)<br>・生活<br>・芸術<br>・体育<br>・特別活動<br>・礼拝 |

注　1）上段は，全国精神薄弱養護学校校長会・他編（1997）『全国養護学校実態調査　平成９年４月１日現在』より作成したもので，1997年４月１日現在の内容である。
　　2）下段は，高等部専攻科を中心にして筆者が本稿において記述した内容を一覧にしたものである。

### 2）本科・専攻科の一貫性

本科と専攻科とを一貫的にとらえているのは，光の村養護学校・土佐自然の家，聖坂養護学校，聖母の家学園，三愛学舎養護学校（及び，若葉養護学校もおそらく含まれよう）であった。また，進学実態においても，進学率約７割の土佐自然の家を除いて，他の３校は９～10割の本科卒業生が専攻科に進学していた。この内，聖坂養護学校は本科３年・専攻科２年を一体的に運営した「５年制高等部」の発想を採っていたが，三愛学舎養護学校は本科と専攻科の区分及び独自性を強調する方向にあり，聖母の家学園も専攻科の独自性を打ち出す途上にあった。

一方，いずみ養護学校及び旭出養護学校では可能な限り本科３年修了時において社会参加（離学）させていく方針がとられている。しかし，それは強制的な性格ではなく，むしろ生徒個々の必要に応じて専攻科教育を活用する視点をあくまでも踏まえてのものである。ただし，いずみ養護学校は専攻科に進学したならば２年間の専攻科教育を修了させようとしているが，旭出養護学校では個々の実態に応じて専攻科を中退させて社会参加させていく傾向にある。こうした機能はこれまで「落ち穂拾い」とも称されてきたが，専攻科の２～３年間を出入り自由な継続教育機関ないし再教育機関と捉え直せば，新たな検討課題が提起されているものと考えられる。

### 3）高等部の教育目標及び専攻科の機能

ところで，上記のように本科・専攻科を一貫性において類型化しても，未だ十分とは思えない。本科と一貫的ないし継続的に専攻科を位置づけようとする背景には，本科・専攻科の15～20（21）歳を子どもから大人への成長過程においてとらえる視点がある。例えば，光の村養護学校・土佐自然の家では，中学部を青年期前期，高等部本科を青年期中期，専攻科を青年期後期として，自らを「青年期全期」に対応した学校としている。これに対して，聖坂養護学校は高等部本科・専攻科を併せて「青年期前期」とみ，三愛学舎養護学校は一般的に「青年期」とみている。また，旭出養護学校では３年制を採っていることもあって専攻科を「成人期入り口」としているのに対して，聖母の家学園では専攻科を含めて「思春期後期」ないし「青年期」としている。今後，実践交流を深める中で，こうした相違点を詰めていく作業が必要と思われる。

とはいえ，専攻科においては，人格的にいかに人間性を豊かに育むかという視点と，厳しい社会において自立していけるように鍛えるという視点とが，常に交錯している。いずみ養護学校では，「明るさとか優しさとかに加えて逞しさというものが備わってきている」「豊かな心を持ち，しかも逞しい人間」と表現したり，逆に「厳しさの中に楽しさがなければならない」「厳しい面を豊かなものに変えていく」とも表現している。旭出養護学校では「生活の質」にも配慮した「生産人」の形成を，聖坂養護学校では「感性の豊かさ」と「生活力を高め自立する力」の育成を，聖母の家学園では「ゆったりとした時の中で人間性の完成」を打ち出している。そして，三愛学舎養護学校では「自己実現と職業的（社会的）自立のはざま」という揺れ動きを自認した上で，「自己実現」と「職業的・社会的自立」という二律背反的にとらえられがちであった両者の統一的達成を追求しつつある。

「建学の精神」を個別に有する私立校にあっては特に，学校間の比較・類型化の手法においてではなく，個々の学校の歩みの中において各学校及び高等部の教育目標とその下での専攻科の機能及び実践の変遷を明確にする必要があった。本稿では，私立養護学校７校別に試行錯誤と実践創造の過程として跡づけてみた。子どもから大人へ，学校から社会へという二重の意味での過渡期性の下

で青年期教育機関であるとともに移行教育機関でもある専攻科のあり方を探る上で，ここに明らかにした私立校の教育課程の特色から，国公立校が学ぶべきものは多い。

追記①：本稿を執筆するに際して，訪問調査や資料の収集において，専攻科を開設している私立養護学校７校の教職員の皆様に大変お世話になりました。ここに記して，感謝申し上げます。なお本稿では，論文という性格上から敬称を略させていただきました。
追記②：本稿は，平成９～10年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(C)(２)「障害児のトランジッション（学校―社会間移行）に関する実証並びに比較研究」の成果の一部である。

## 《註》

1）拙稿（1998)「養護学校における高等部専攻科の試み―学校から社会へのトランジション保障の視点から―」『鳥取大学教育学部　教育実践研究指導センター研究年報』第７号，pp.19-26。
2）文部省初等中等教育局特殊教育課『特殊教育資料』の1989年度統計には専攻科の欄に「家政科」と表示されているが，いずみ養護学校に照会したところ設立時から普通科のままであるという。『特殊教育資料』の誤記と思われる。
3）根本ヒトミ（1996)「家庭科の考え方」『春秋二十有余年―安養寺時代記録誌―』いずみ養護学校，p.38。「創立の記」『春秋二十有余年』，p.2。
4）(1992)「設立の動機」『記念誌　三十年』いずみ養護学校，p.2。なお，「田山さんが中心になり，二人の専任の先生をおいて洋裁や手芸，料理などを教え始めた」という新聞記事の記述も残っている（朝日新聞［昭和35年10月10日付け］「知恵遅れの子らと生きる　仙台市いづみ学園などを表彰」『記念誌　三十年』，p.３所収)。
5）米森繁（1996)「はじめに」『春秋二十有余年』，p.37。
6）千葉たかよ談（1992)「回顧」『記念誌　三十年』，p.63。
7）花坂テル・根本ヒトミ談（1992)「回顧」『記念誌　三十年』，pp.64-65，p.69。
8）田山仁子記『春秋二十有余年』，p.37所収。
9）千葉たかよ・花坂テル談（1992)「回顧」『記念誌　三十年』，pp.69-71。
10）米森繁（1990)「『建学の精神』の継承」『学校だより』21号（『春秋二十有余年』，p.14所収)。
11）前掲，根本ヒトミ（1996)「家庭科の考え方」。
12）渡辺美幸談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.74。
13）早川由希子・小野久美談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.75。
14）石川望・本間典子談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.76。
15）大沢佐千子・本間典子談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，pp.76-77。
16）前掲，根本ヒトミ（1996)「家庭科の考え方」。
17）いずみ養護学校（1997)『専攻科資料』，p.4。同様の記述は，泉善雄（1996)「専攻科の職業―コース制導入―」『春秋二十有余年』，p.44。
18）阿部和治（1996)「作業学習」『春秋二十有余年』，p.43。
19）村越充（1996)「進路指導」『春秋二十有余年』，pp.50-52。1986～95年度の10年間の合計で，本科は卒業生243人中の専攻科進学者116人（48％）・各種学校進学者14人（６％）・就職者57人（23％）等であり，専攻科は卒業生125人中の専門学校進学者２人（２％）・就職者42人（34％）等であった。その内，本科・専攻科を通しての就職者99人全体の37％がクリーニング業，32％が縫製業，17％が食品加工業であった。
20）馬場信子談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.77。
21）石川望談（1992)「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.82。

22）馬場信子談（1992）「現状と展望」『記念誌　三十年』，p.83。
23）西谷英雄（1984）『もうひとつの教育―土佐・光の村からの挑戦―』学習研究社，pp.33-34。
24）同上書，p.59。
25）同上書，p.66。
26）光の村養護学校土佐自然学園（1997）『平成９年度　学校要覧』，p.1。
27）前掲『もうひとつの教育』，pp.83-88。
28）同上書，p.182。
29）前掲，光の村養護学校土佐自然学園（1997）『平成９年度　学校要覧』，p.13。
30）同上書による各対応年度の進路状況の統計数字と相違している。しかし，いずれが正しいかは確認できていない。
31）学校法人旭出学園（1997）『旭出養護学校要覧　平成９年６月』，p.1。
32）同上書，p.3。
33）同上書，pp.3-4。
34）同上書，pp.5-12。
35）旭出養護学校（1997）『1996年度公開見学会資料　専攻科の教育』1997年２月20日，p.1。具体的には，「専攻科の生徒の殆どが在学中に二十歳を迎えます。また，専攻科は学校教育の最終機関でもあり，今までの学校教育の仕上げと同時に社会に巣立つ準備の時期でもあります。／二十歳という年齢は人生の大きな節目です。成人式を迎え，大人の仲間に入り，立派になっていこうという新たな誓いの時です。また，選挙権や障害基礎年金の受給資格を得るといった制度面が変わる時でもあります。このような制度の変化の初歩の時期に基本的な事柄を指導・援助する必要を感じています。」と記述されている。
36）聖坂養護学校（1988）『聖坂養護学校20年の歩み』，p.10。
37）同上書，p.22。
38）同上書，pp.22-23。なお，『私立聖坂養護学校　1993年度　児童・生徒募集案内』においても，「キリスト教主義」と「オープンシステムによる指導」とが特徴として記載されている。
39）同上書，及び田村一男（1985）「本校教育の基本的構造」『ひじりざかの教育実践』第６号，pp.12-13。
40）田村一男（1981）「発達段階に応じた基本的な活動ステップ表づくり」『ひじりざかの教育』第３号，pp.1-45。
41）菅原新也（1982）「発達段階に応じた言語指導ステップの構想表づくり」『ひじりざかの教育』第４号，pp.1-20。
42）安海のぞみ（1983）「発達段階に応じた『数量』指導ステップの構想表づくり」『ひじりざかの教育』第５号，pp.17-32。
43）矢部正（1983）「発達段階に応じた『生活』指導ステップの構想表づくり」『ひじりざかの教育』第５号，pp.1-16。
44）田村一男・松井務（1986）「生活力診断表について―児童・生徒の生活力を高めるために―」『ひじりざかの教育』第７号，p.1。
45）前掲『聖坂養護学校20年の歩み』，p.18。
46）柴田昌一（1996）「人間的な信頼関係」『聖坂養護学校　学校だより』1996年10月31日付け，pp.1-3。
47）春日孝行（不明）「進路指導の方法について」（聖坂養護学校高等部進路担当からの保護者向け印刷配布物）。
48）学校法人養護学校聖母の家学園（1997）『1997年度　学校要覧』，p.6。
49）同上書，p.6。
50）見晴台学園（1996）『飛び立つ―ＬＤ（学習障害）児の学校を拓いて―』かもがわ出版。なお，本文中の教育課程などの記述は，見晴台学園（1997）『1997年度　学園案内』による。
51）学校法人養護学校聖母の家学園（1998）『1997年度　専攻科実践報告会』，同・高等部専攻科（1997）

『専攻科の理解のために《第３次改訂版》』。
52）前掲，学校法人養護学校聖母の家学園『1997年度　学校要覧』，p.6。
53）本庄義雄（1988）「カナンの園から―連載２―ヴィジョンを掲げて」『福音と世界』1988年２月号，p.6。
54）本庄義雄（1988）「校名の命名について」『三愛学舎十年の歩み』，p.21。
55）社会福祉法人カナンの園（1974）「カナンの園」第６号，『三愛学舎十年の歩み』p.23所収。
56）社会福祉法人カナンの園（1975）「カナンの園」第７号，『三愛学舎十年の歩み』p.24所収。
57）学校法人カナン学園三愛学舎養護（高等）学校（1978）「三愛だより」第１号，『三愛学舎十年の歩み』p.29所収。
58）社会福祉法人カナンの園（1979）「カナンの園」第14号，『三愛学舎十年の歩み』p.31所収。
59）社会福祉法人カナンの園（1983）「カナンの園」第22号，『三愛学舎十年の歩み』p.36所収。
60）社会福祉法人カナンの園（1984）「カナンの園」第24号，『三愛学舎十年の歩み』p.37所収。
61）「はざまに生きる　知恵遅れの人たち　実を結んだ就労教育」『岩手日報』1986年９月19日付け，『三愛学舎十年の歩み』p.39所収。
62）本庄義雄（1994）「三愛精神に基づいた学習内容の充実」。
63）学校法人カナン学園三愛学舎養護（高等）学校（1997）『1997年度　学校要覧』，p.4，p.8。
64）本庄義雄（1988）「カナンの園から―連載４―人間として生きるために」『福音と世界』1988年４月号，p.8。
65）学校法人カナン学園三愛学舎養護（高等）学校（1979）『三愛学舎の教育―研究紀要１―1978年度』，pp.146-147。
66）本庄義雄（1988）「カナンの園から―連載６―神にゆだねる生活・一人の障害者の受洗」『福音と世界』1988年６月号，pp.6-9。

## abstract

Postgraduate courses of upper secondary departments of special schools are worthy of note as further educational institutions for over 18 years old persons with disabilities. In this paper, the characteristics of curricula in postgraduate coueses of 7 private special schools are described as a model or trial for national and municipal special schools planning to open postgraduate courses.

1)Three types of core curriculum, vocational education type, academic education type and home and school life education type, are found out.

2)There are two types of articulation from 3-year regular couese to 2 or 3-year postgraduate corse, integrated or connected type and separate type.

3)The idea and practice of adolescent education in these schools to promote full development of personality, self realization and qualities of life, should be given more attention from a viewpoint of successful transition of young people with disabilities from school to adult and working life.

Key words: special school, postgraduate course of upper secondary department, curriculum, transition, vocational education, adolescent education